

風俗奇譚

男女性風俗の粒
より話題の探究

風俗奇譚

鞭のストリップ・ラッシー夫人

特集
被虐の中の陶醉

12月特別号

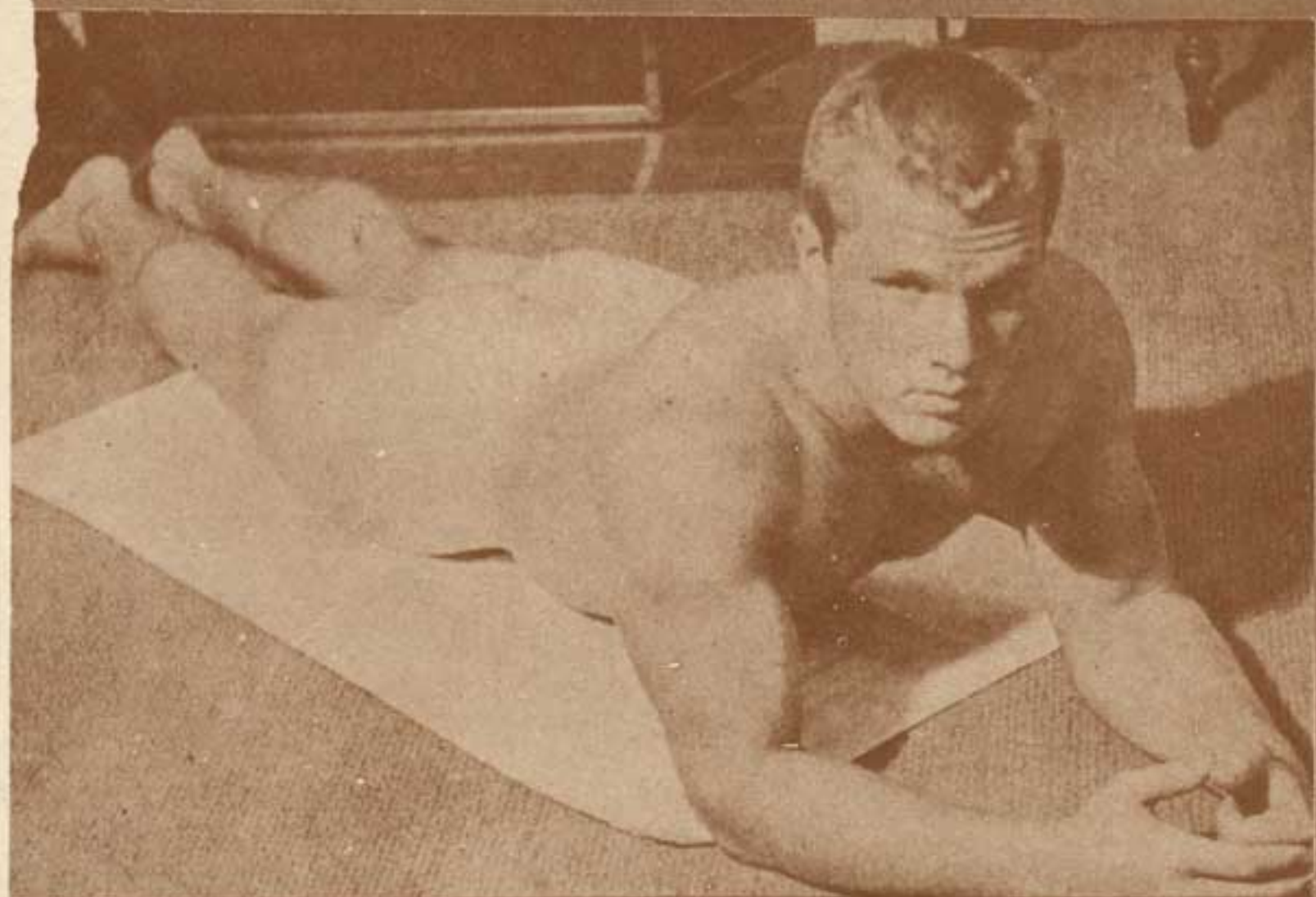
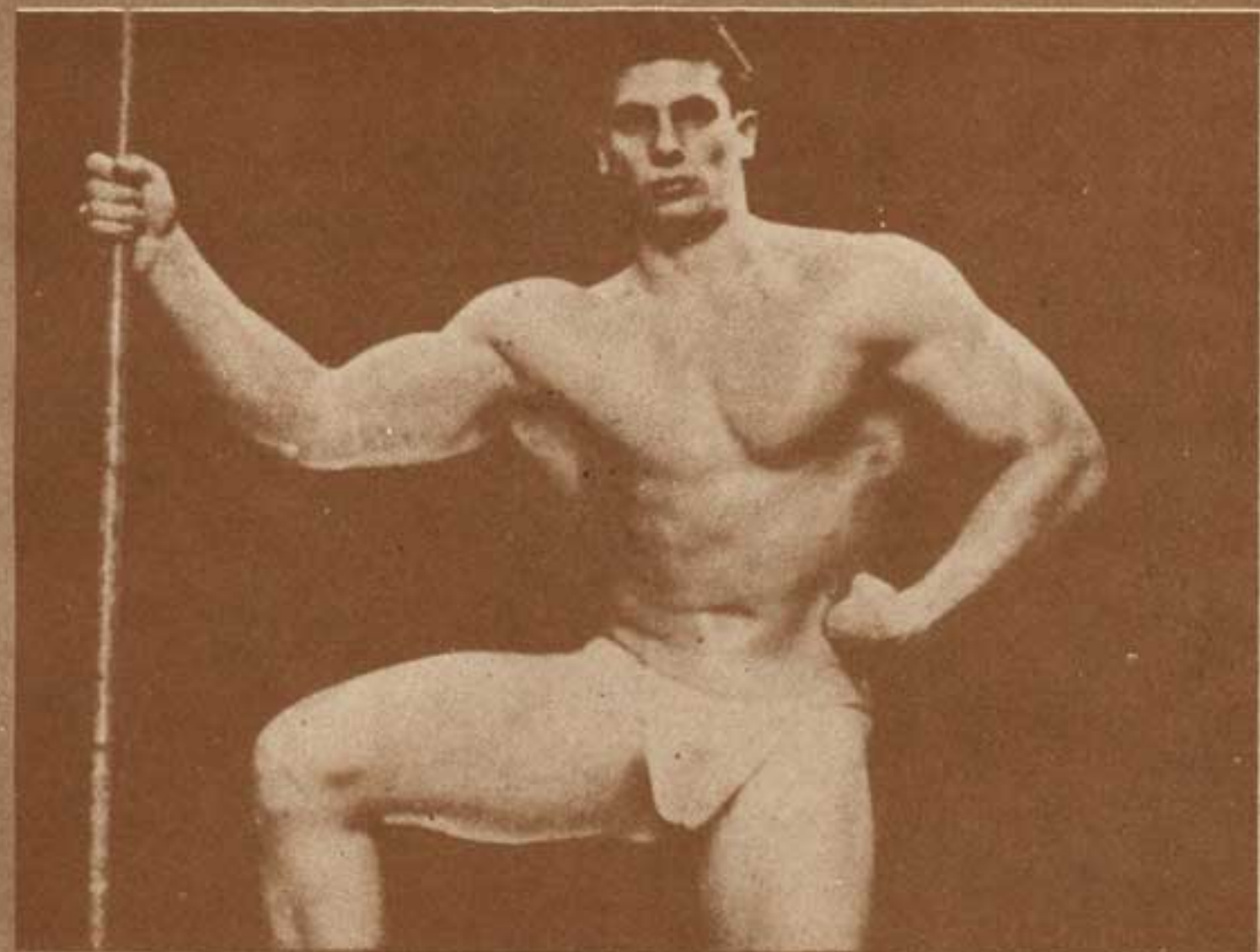
昭和36年12月号

定価220円





舞台でもムチは魅力のポイントである



★表紙……………田上恵子
★男のポーズ……………(表紙)
★舞台でもムチが……………(八三)

被虐の中で
ひらく花

女体かなしく 亀甲に縛られて 悶悦の姿態
楽屋にとらわれて 足吊りの女学生 縄喜のとき
仮死の前の陶酔 被縛の肌輝く時 ピアノの前で
苦悶のポーズ 楽器のあいだで パンティが白い
しびれる法悦 野ざらしのポーズ 縛体長々と
逃げられない 手すりの責め

〈モデル〉

青山桂子・浜田さなえ・西牧えり子・加納美也
浜 ゆかり・須原圭子・大江美佐江・伊集院ふみ

特集 被虐の中の陶酔

鞭と尻と師走の風

……獅々村 裕(四八)

若い女を得て老人は生活力を取り戻した。だが彼女の歡心をかうためには尻にムチが

血まみれ臀のマダム

……ミッツシェール・クレール
高槻珠子・沢(六〇)

トゲの出ている生枝で打たれた臀からは鮮烈な血潮がしたり落ちて陶酔が生まれる

お京様の召使となつて

……村田敬三郎(七三)

隣室では最愛の女性が男に抱かれていた。縛られころがされ聞き耳たてる彼の心は?

「楽しみの家」の女貴族

……谷 貫 太(二六)

皇帝の経営する「楽しみの家」で、サデイスチンはすべて男にムチをふる女貴族だ

ヒップ花火(後編)

……北 潤(八〇)

ハダカの尻を三つならべて、そのまん中で打ちあげられた五彩の花火の鮮烈なる光茫

浣腸に陶酔する仲間達

……夏川 絹子(八九)

ピンポン玉、ナス、ソーセージと次々に行なう浣腸プレイの中で陶酔する男女の群れ

お姫さまと奴僕の日

……真野 麗(九四)

もと華旅のお姫様に仕えるわたしは、大の首輪をつけられ自転車でひっぱられて走る

マダム・ラ・ラッシ

……パン・ロッド(二五)

ムチを当てるために飼っている女主人と男。その肌に容赦なく炸裂するムチの苛烈さ

性転換手術はこうして

……医学博士 石川 明(二〇)

地獄城のマナイタ石

……赤木 恵介(二二)
……古正英生・え(二二)

恨みをのんで息たえた妊婦たちの血が大きな石にしみこんで怨霊となってアタをする





深夜の乗馬

……一ノ瀬悦子(二九)

全裸にハイヒールの長靴スタイルで深夜の馬場に馬を駆るとき、奇妙な法悦が訪れる

男よ、グッドバイ

……旅川 仁(二五)

女装の身を好きな男に抱かれるときのあたしは、二度とふたたび男に戻りたくない!

女囚牢中の無残な私刑

……金沢武行(二六)

女牢の中では世間から隔絶された、想像を絶する女の冷酷な私刑が次々に行なわれた

S・Mロータリー

……(二四)

ホモの窓

……(二五)

女装愛好の部屋

……(二六)

連載時代小説

多門砦火の巻

……芦立鋭吉(二六)
……小田利美・え

カスガイで辜丸をとめられた多門は息たえる瞬間、味方の勝利を告げる狼火を聞いた

連載ア
ブ小説

女流作家との夜

悦虐の
彷徨⑧

……青山三枝吉(二六)
……田上恵子・え

「次はあなたの番よ」と言っただ彼女は、喜々としてあたしに縄をかけはじめた。すると

☆読者サロン

……(二七)

▼代理部分譲写真のご案内

……(二五)

▼旧号在庫のお知らせ

……(二三)



花はひらく中で虐被

女体かなしく

長じゅばんのすそは乱れて太ももがあらわれ 胸もとからは乳ぶさがこぼれている この羞恥の姿を越えて 縄の悦虐は からだの奥で 甘いメロディーをかなでる 〈モデル・青山桂子〉





楽屋にとらわれて

伴奏入りで責めようというのか
楽器のかたわらで 加虐の時を待
っている（モデル・浜田さなえ）





仮死の前の陶醉

首を絞められて 呼吸困難な時期を乗り越え
すと スーッと天国にのぼるような甘美な
陶醉がおとずれる〈モデル・浜田さなえ〉

苦悶のポーズ

乱れ散った縄の上に 縛られた身を凝こ
ろがされ じわじわと苦痛がしみどおり
女は のたうつ モデル・西牧えり子



しびれる法悦

縛られた女体に 不思議な生理現象があらわれる 苦痛が身内にしみとおると コダマのようにからだの奥から 奇妙な陶酔がわきあがり 全身にひろがっていく 苦痛と法悦のないあわさる時〈モデル・西牧えり子〉



逃げられない

のがれようとするが 緊縛の不自由な
姿勢では どうにもならない 力尽き
た時 倒れ伏して 加虐の手を待つよ
りしかたない 女の宿命を負った 一
つのポーズだ! ヘモデル・加納美也





亀甲に縛られて

亀甲しぼりは 昔からある打ち縄の形式だが 今でも
女を縛るときに用いる 女を逃がさないために 女を
拘束して 責めさいなむために 〈モデル・須原圭子〉





足吊りされる女学生

スカートをはぎとられ 素肌をむきだしにして
おさげ髪の女学生が 手首を縛られたう
えに 足まで吊られてへモデル・青山桂子へ





被縛の肌輝く時

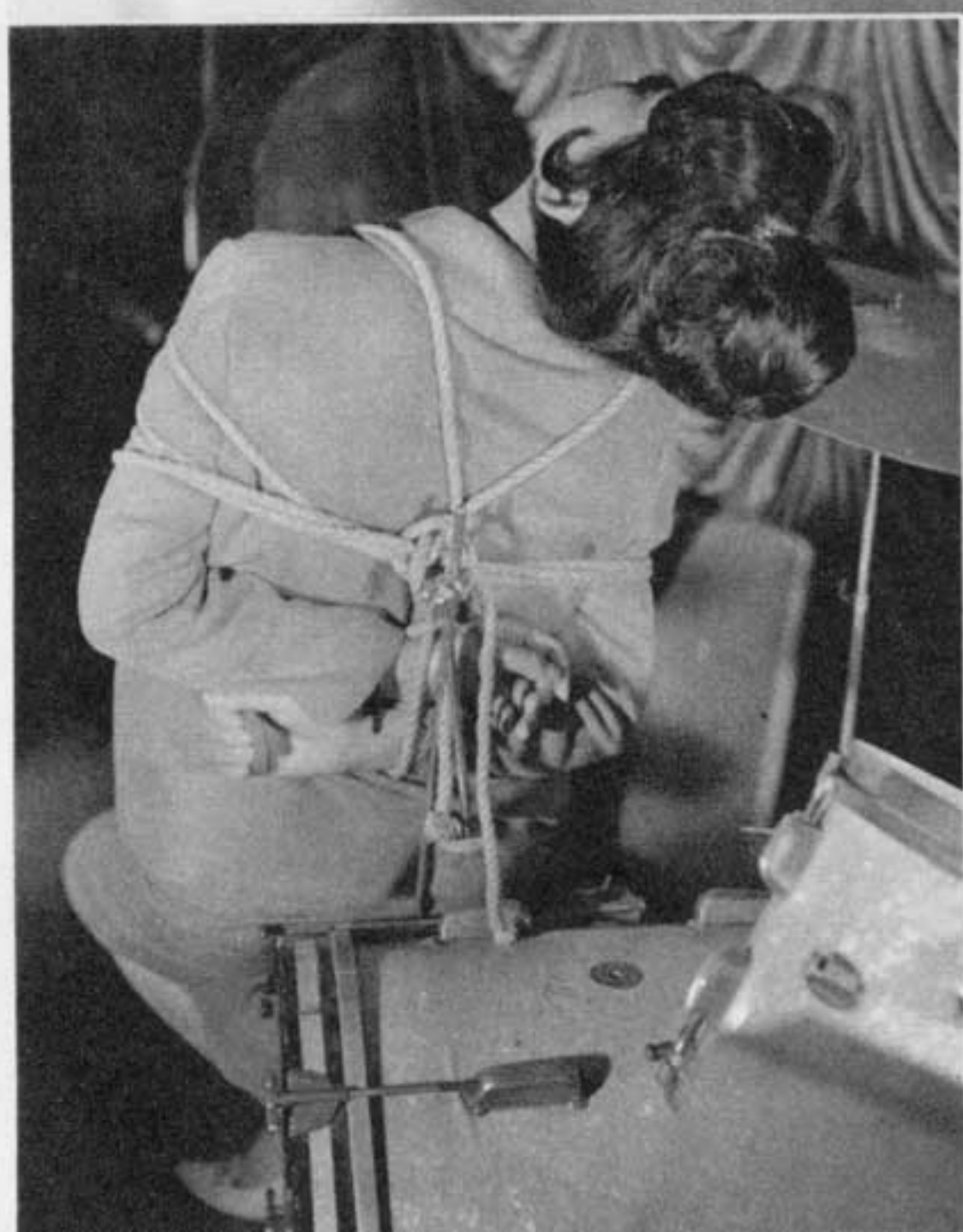
肌が電灯にはえている 加えて緊縛の陶醉からくる感覚
が 体内からの輝きを増している 女の美しく見える時
女がひっそりと被縛にひたる時へモデル・西牧えり子へ





楽器のあいだで

維然と置かれた楽器のあいだに 縛られた身を
置かれ いっせいに打ち鳴らすとしたら
これは騒然たる責めへモデル・浜田さなへ





野ざらしのポーズ

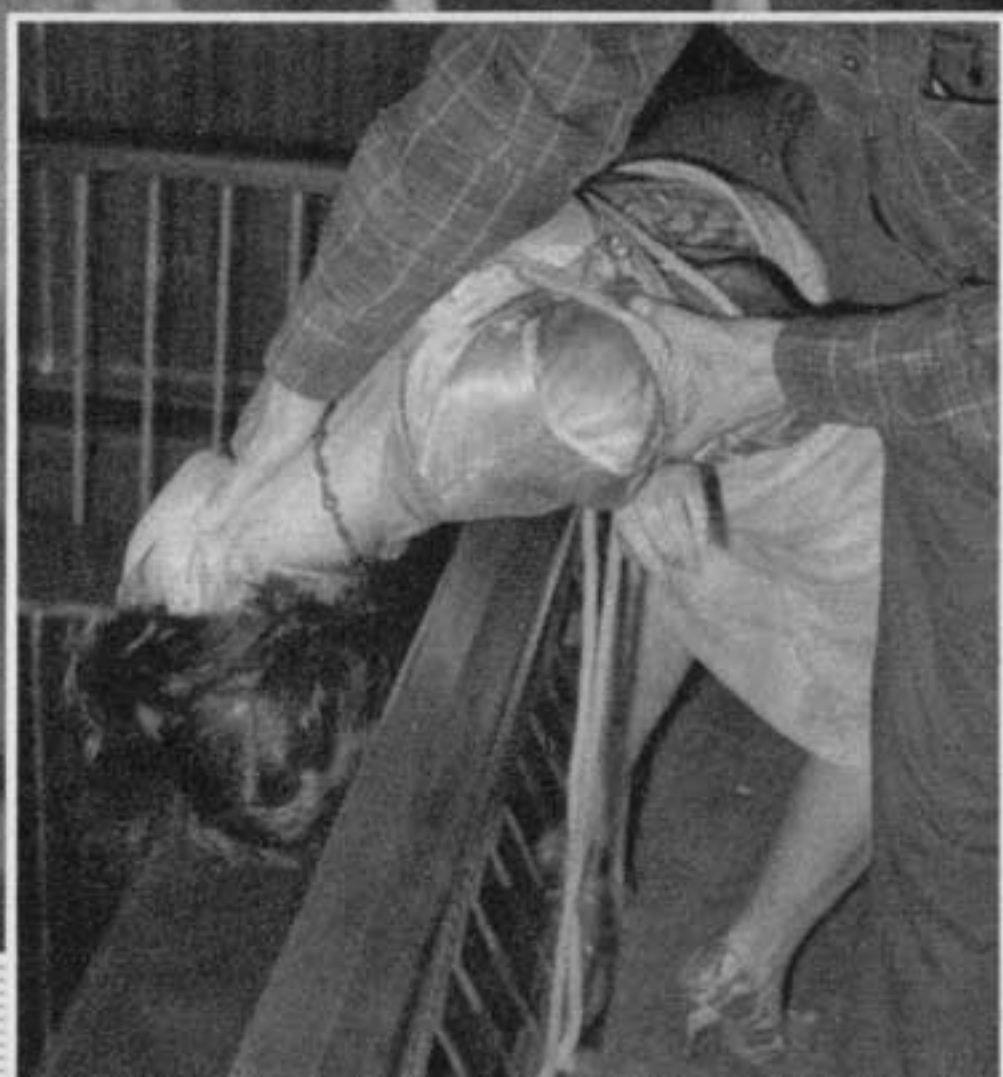
道路わきの格子塀に両手を縛られた女は 道
ゆく人の目にさらされる この羞恥の中で女
はどうしようもないへモデル・浜ゆかり





手すりの責め

二階の手すりに 緊縛の身をうしろざま
に乗り出して 首をしめられる 不安定
の恐怖と苦痛とへモデル・西牧えり子

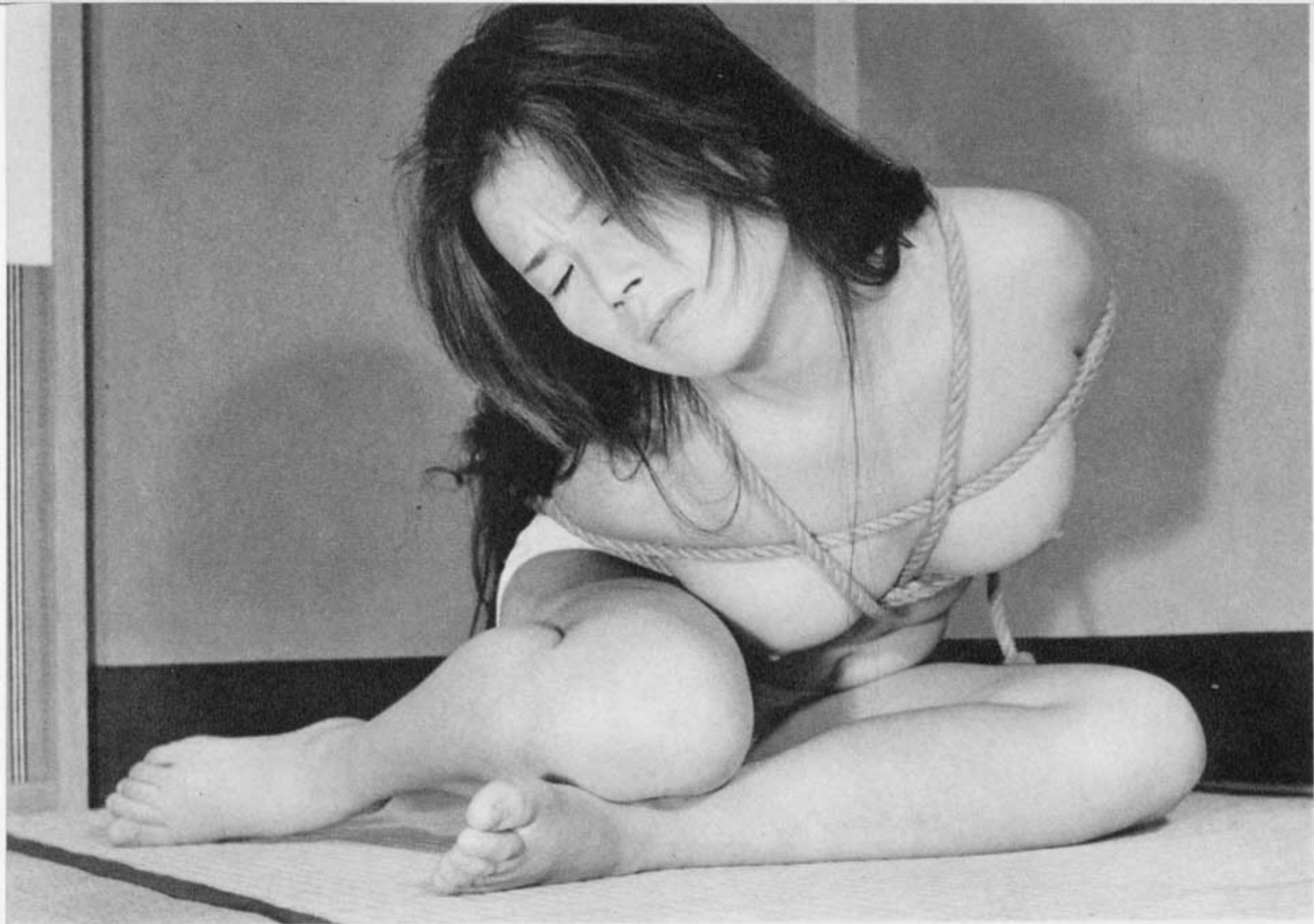




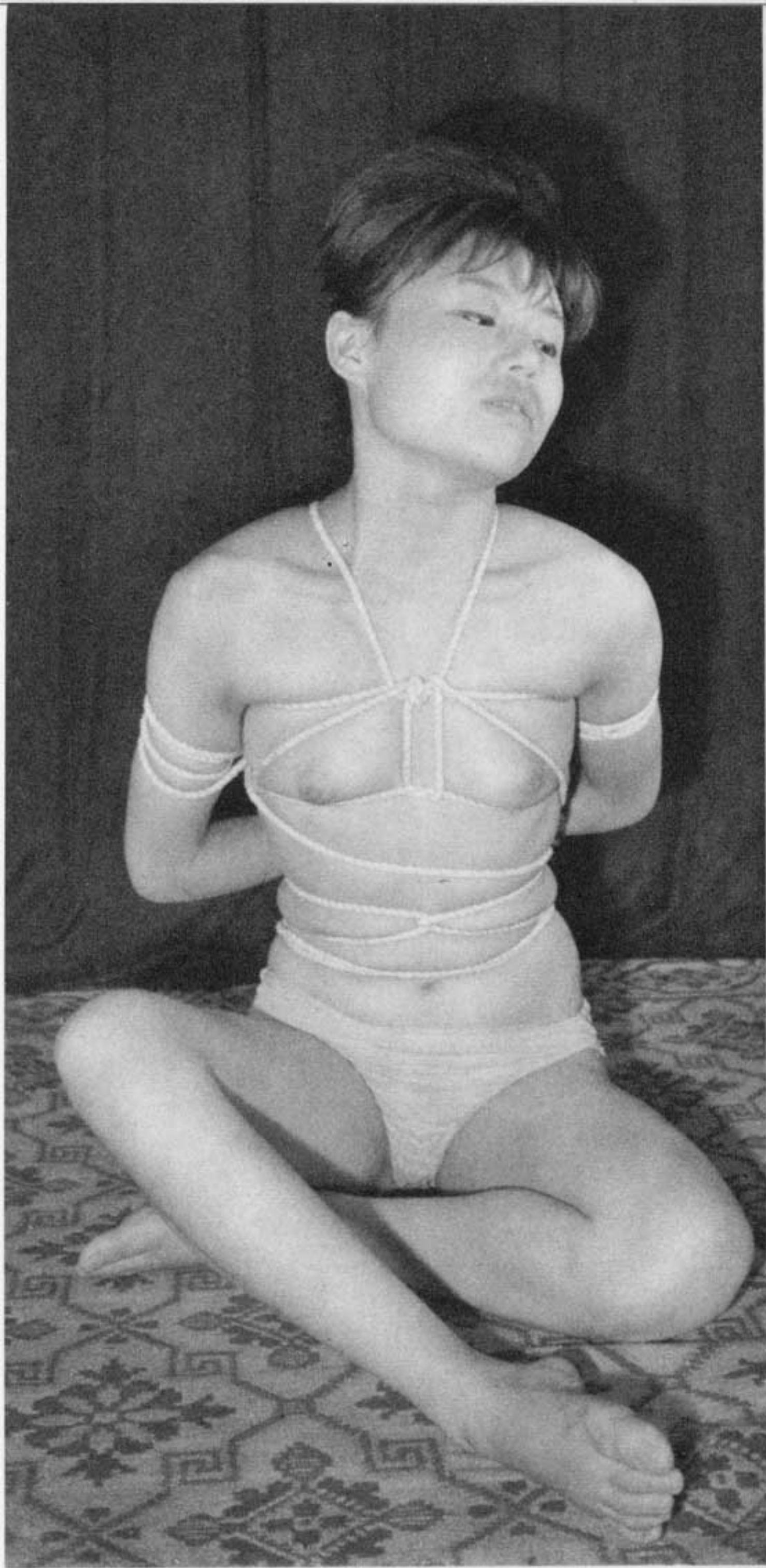
悶悦の姿態

縄が肌をかみ乳ぶさをしめつける その苦痛
の中から生まれる陶醉へモデル・青山桂子へ









縄喜のとき

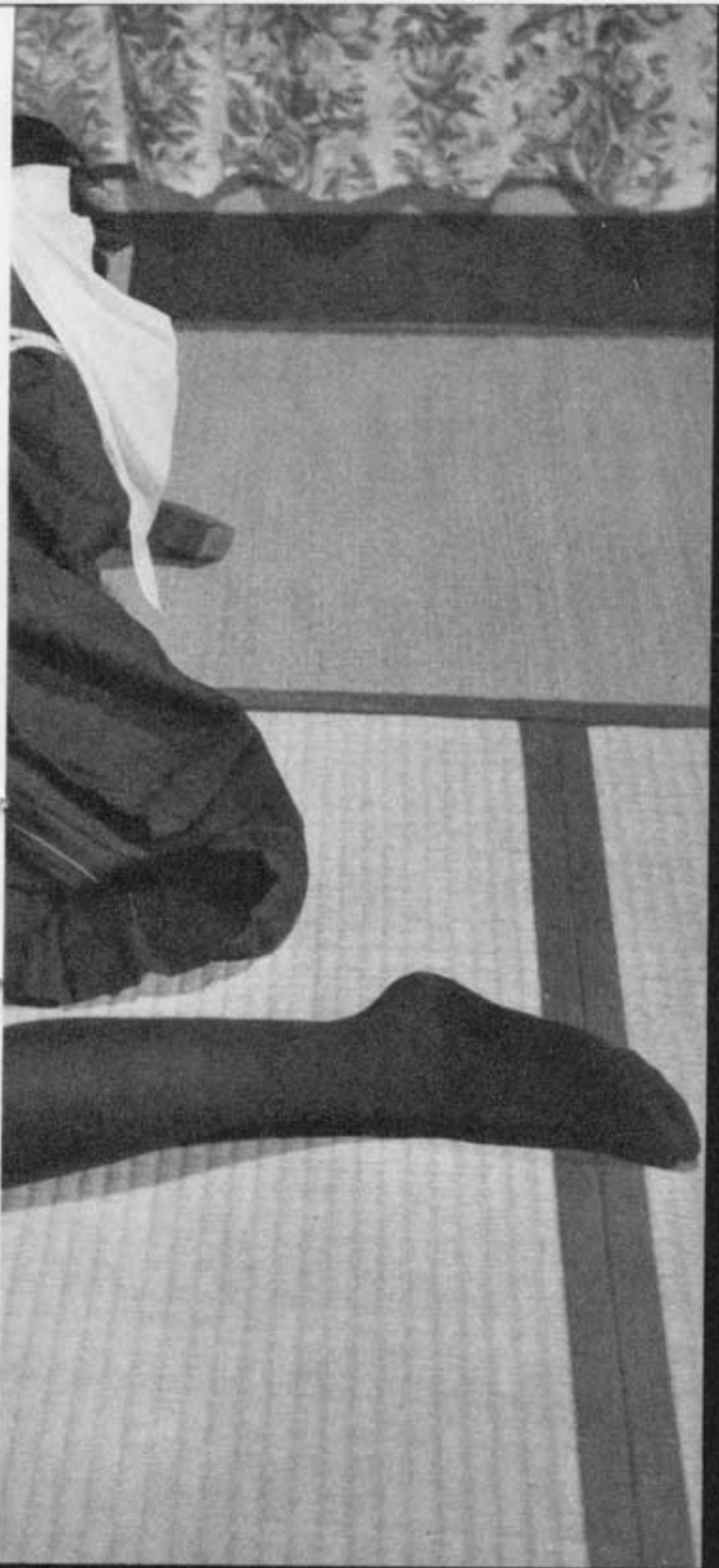
縄が女体に巻きつくとき 奇妙
な喜悦が 女体をつつむ あや
しい官能が しびれるほどにも
うづく 〈モデル・大江美佐江〉



ピアノの前で

ピアノの練習中でも襲われたのであろうか セーラー服の女学生が縛られてあわれ 加虐のいけにえにされようとしている ピアノのキーの上にのせられれば 音階のはずれた旋律が 彼女の運命を占う〈モデル・西牧えり子〉



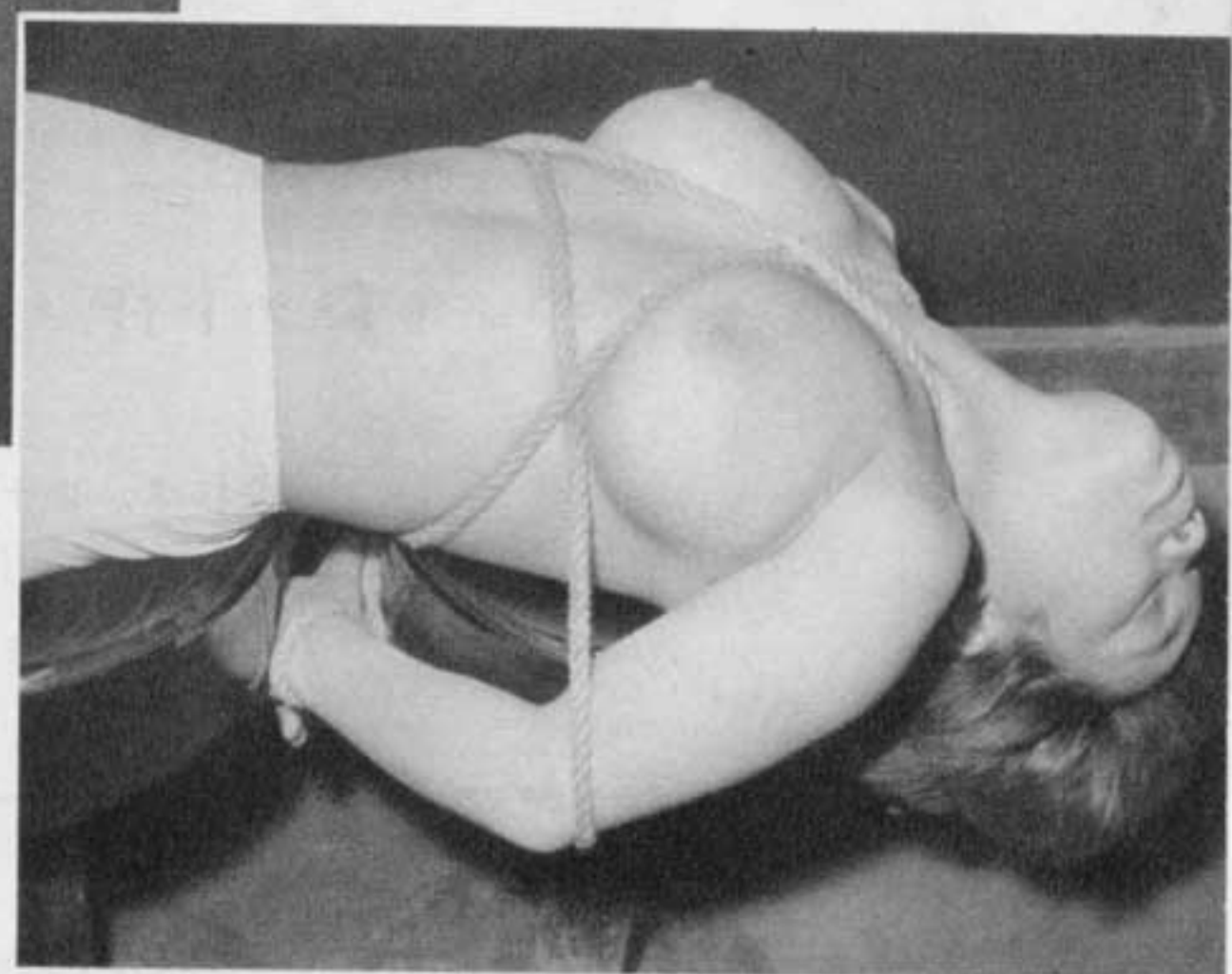
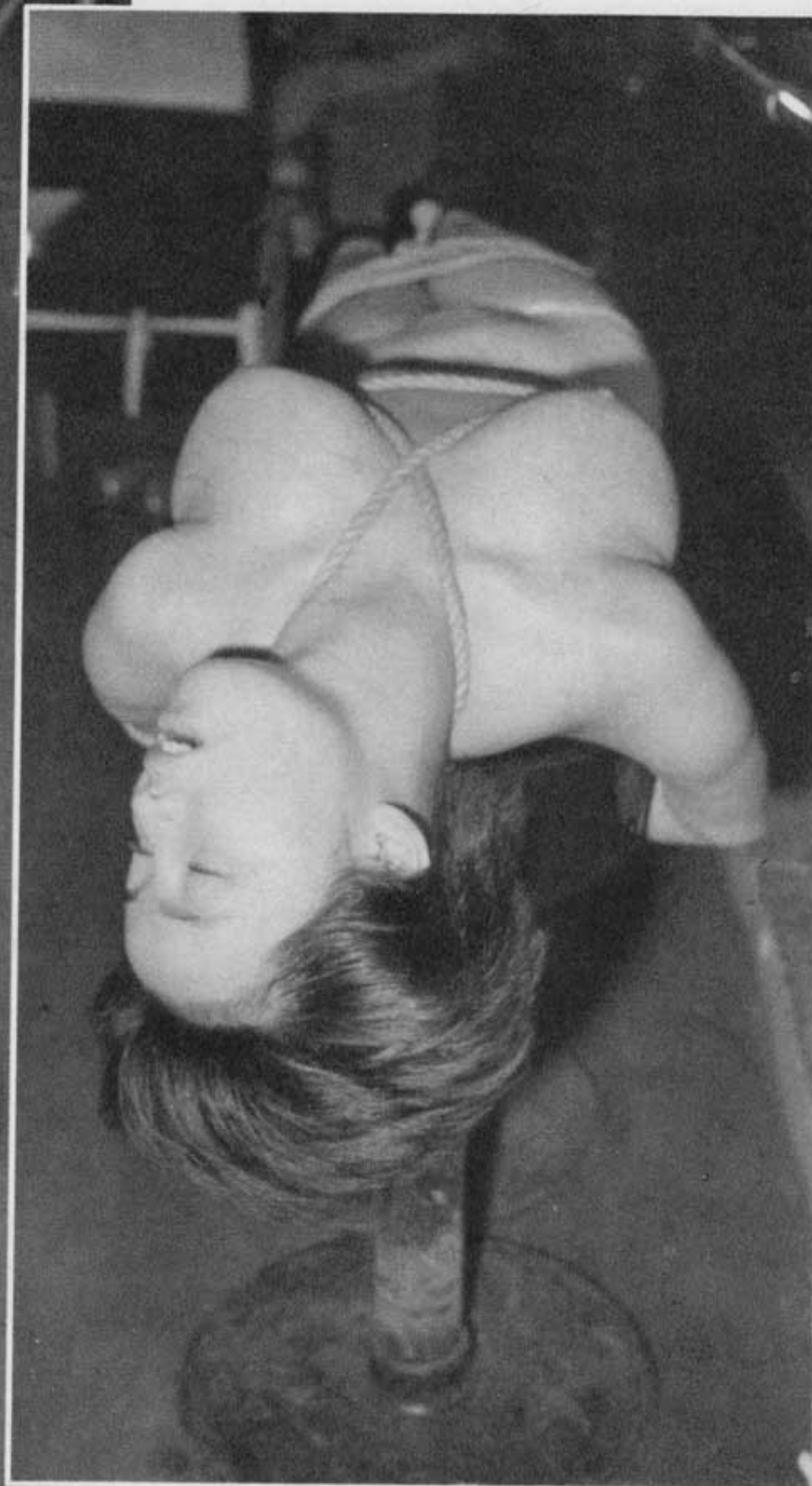




パンティーが白い

乱れたすそから白いパンティーが目にしみ黒い靴下が印象的に光るへモデル・西牧えり子

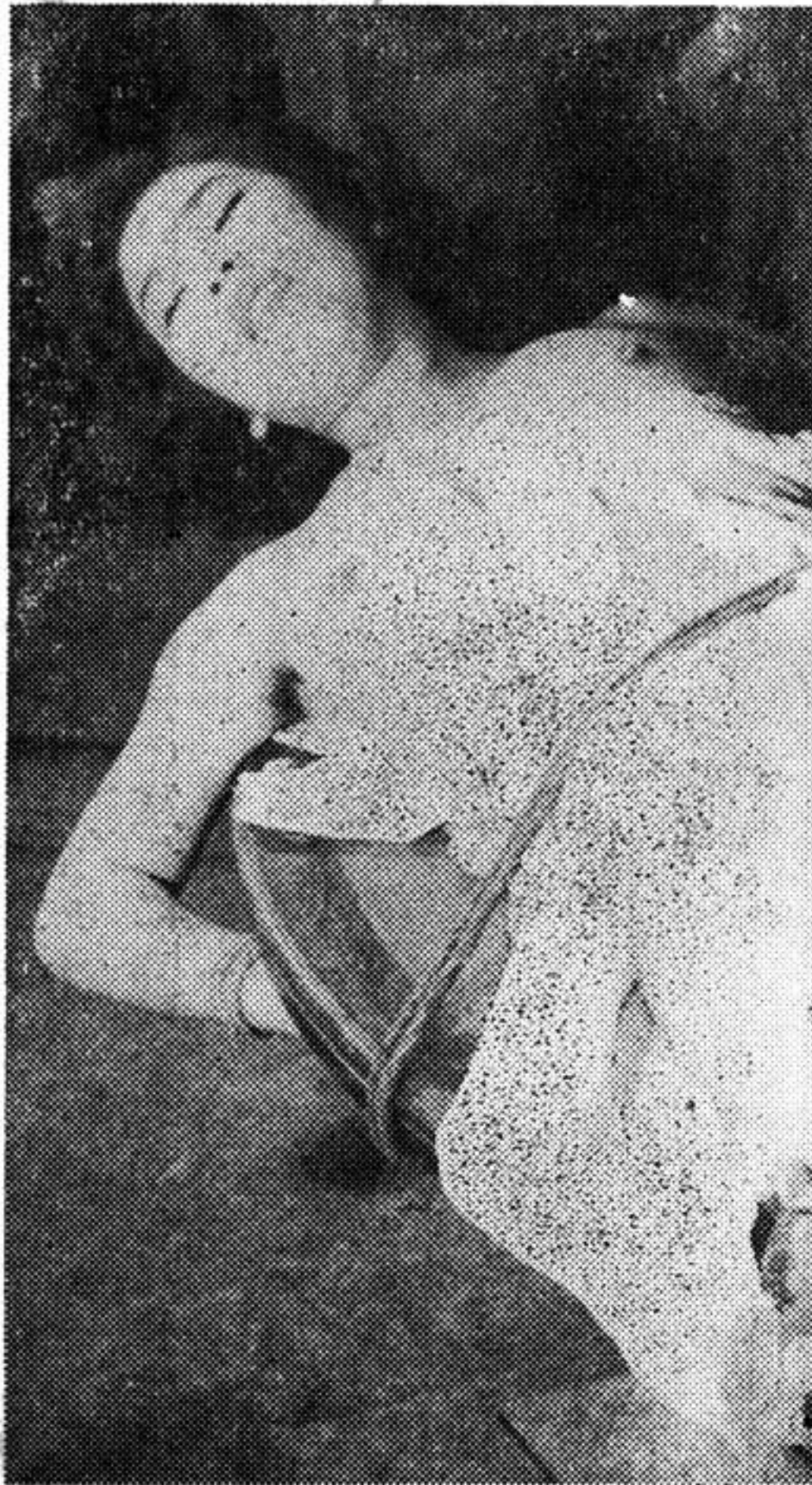




縛体長々と

丸イス二つの上で 縛られた身を
長々とのばして ぐったりと責め
に耐える 〈モデル・伊集院ふみ〉

譚奇俗風



★ 1961年12月特別号 ★

特集・被虐の中の陶醉

- (創作) 鞭と尻と師走の風
 - (外国文学) 血まみれ臀のマダム
 - (告白) お京様の召使いとなって
 - (創作) ヒップ花火(後編)
 - (告白) 浣腸に陶醉するあたしと仲間たち
 - (MS) 『楽しみの家』の“皇帝”と“女貴族”
 - (創作) おひめさまと奴僕的一天
-

風走の師と尻と鞭



■「おんじい、あるけ」ムツチリした太ももで胴をグイとしめあげられな
■がらはい回り、若い女の肉体の重量に陶醉する、ミイラのような老人ノ

獅々材 裕

沖 涉 司・え

帰って来た紅子

「おんじい、あるけ」
とさげんだ。

わたしの背にまたがった紅子は、太ももで胴をギュッと
しめあげてくる。

二十六歳のたくましい太ももがしわばみ、たるんだ。
七十歳のわたしの脾腹を、コリコリとかんでくるのだ。
それは内臓までしめあげてくるようだ。

「ウーン」

わたしはスッポンのように、シワだらけの首をのば
してうめいた。

そして、紅子の太ももにはさみつけられた肉とい

う肉が、よろこんでノビをして踊りだすのを感じていた。
「紅子が帰ってきたのだ。紅子が帰ってきたのだ」
わたしは紅子を背にのせて、畳の上をはいながら、心の中でそうくり返した。
しびれるようなうれしさだった。
さわやかに畳の上にのびている、早秋の午前の日差し。



くる」
という気がした。
あんな変わった女は、だれとでもうまくいくとは思えない。
それに紅子とわたしの肉のむすびつきは、二十六歳と七十歳という
ひらきこそあれ、世間一般の常識をこえたものだった。
「きっと帰ってくるさ」

紅子の内ものあたりから、ほのかににおってくる女のおい。
なんというしあわせにあふれた日々。
それがまた、はじまろうとしているのだ。
しかし、ついさっきまでは、そうではなかった。
わたしは業平橋にちかい、墨田区小梅町のその家で、ひとりぼんやりしていた。
「紅子のやつ、いまごろはどこでどうしているのかな」
考えるのはそのことだけだった。
一月ほど前、紅子が若い男をつくっていなくなったのだ。
わたしはがっくりした。
七十歳という年齢が、ヒシと感じられた。
孤独の影が、せまい家の中に、急にひろがりだすようだった。
しかし、わたしは心のどこかでは、
「紅子は帰ってくる。きっと帰って

わたしは早くもひっぱりだした^{あわせ}裕のえりをかきあわせながら、澄んだ秋の朝の日の色をじっと見ていた。

そのときだ。

ガラリと音がして、玄関があいたのは――。

そのとたん、わたしは一種の予感のようなものがあつた。

はっとして顔をあげると、そこに紅子が立っていた。

「紅子！」

「うん」

紅子は、テレたような、ふてくされたような様子をしていた。

家を出るときに服装だったブラウスとスカート姿から、ウールの和

服姿に変わっていた。

そんな、ちょっとした点をのぞくと、まるでちょっとそこまで買い

物にいつてきた、という感じだった。

「ああ、つかれた」

といって、ぱったんぱったん、あおるような足どりで座敷に上がっ

てくると、そこでゴロリと足を投げだした。

いかにも、自分の家に帰ってきたのだ、という感じが自然にでてい

た。

わたしはそれがうれしかった。

紅子にシキイの高い思いなんか、させる気はなかった。

彼女が家をあけていたあいだの行動や、男のことを問いただす気も

なかった。

帰ってきてくれさえすればいいのだ。

紅子の、足が、胴が、胸が、いまわたしの目の前にある。

そのことだけでたくさんなのだ。

わたしは彼女のそばにいざりよると、よく帰ってきた、よく帰ってきた、というように、その足を着物の上からなでさすりながら、

「朝飯はすませたのかい。何かつくろうか。それとも？」

性急にたたみかけた。

紅子は、返事をするかわりに、

「おんじい、相変わらずだね、アハハ」

男のように笑った。

それから、

「このほうがいいんだろ」

着物のすそをすべらせて、片足を高くハネあげると、ぐっとわたしの顔におしつけるようにした。

わたしはそれに鼻をつけると、シュッと音をたてて、紅子の肌のにおいを吸いこんだ。

紅子はそんなわたしの様子を見ていたが、

「おんじい、久しぶりでイジめてやろうか」

いうなり和服のまたを大きく割って、わたしの背にまたがってきた

のだった。

年よりが好きよ

紅子――。

この女をわたしは錦糸町公園に近い、^{たいへいちょう}太平町の飲み屋でひろった。

色が白くて大柄なからだをしていた。

笑うときは上体をそらせ、

「アハハ」

と男のように大口をあいて笑った。

そのときキラリと光る奥歯の金冠が、シビれるように色情的な感じだった。

「おとうさん、あたい、おとうさんぐらいの人が好きよ。うんとイジめてみたいわ」

彼女はわたしにからだごと押しつけるようにして酌をしながら、色っぽいうわ目づかいで、こちらの様子をうかがった。

「フン、うまいことをいってやがる」

わたしは腹の中でそう思った。

紅子ぐらいの女が、七十の老人に興味をしめすといえ、いずれ下心があつてのことにきまっている。

のんきたらしい日ごろの様子から、彼女はわたしを小金をもったひとりにぐらしの老人、とニラんだにちがひなかった。

だが、わたしはまんざらでもなかった。

彼女のそんな悪女めいたところが、かえって魅力だった。

「だまされて、入れあげてもいいな」

そんなふうにした。

彼女がおもしろい目を見させてくれるのなら、持ち金の多少は減つたて惜しいとは思わなかった。

約束していっしょに浅草に映画を見にいった。

帰りに「鮎忠」によつた。

それから、当然のことのように、千束町の旅館にいった。

山形の女だった。

悪魔のように白い肌をしていた。

肉は美味だが、あっさりしているようであぶらっこく、いくら食べ

ても食べあきない北海のカニのような肉質だった。

「山形の女はホレっぽいんだよ」

彼女は自分でそんなことをいいながら、ぐいぐいのしかかつてきた。

その荒っぽい愛撫に、わたしはいくらかどぎもをぬかれた。

「たいした女だ」

と思った。

それと同時に、

「とうさんぐらいの人、あたい好きよ」

といった彼女のいつかのことは、まんざらウソでもないかもしれない、と思った。

七十になるわたしのからだに、もう壮年のおもかげはなかった。長い年月は、わたしの肉をしぼませ、たるんだ皮袋のようなものになっていた。

肌には老人特有のにおいもした。

そんな、しなびおとろえた老人のからだを責めつけ、その残り火をかきたてることに、紅子はへんてこな興味を感じていらしかった。

「ホラ、しっかりしなよ」

彼女はそういつてわたしをしっかりとつけながら、自分の欲望をみたそうとした。

わたしのからだはきしみ、のどはゼイゼイと音をたてた。

殺されそうだった。

関節がバラバラになりそうだった。

だけど、紅子がとてもうまくせめつけるので、わたしの枯れた泉は、血を吐く思いでおのれのいのちを吐きつづけた。

そして、精も根もつきはてたように、あばらのあたりをあえがせながら横たわっているわたしを見て、紅子はまたしても、

「とうさん、とうさんぐらいの人、あたいたい、とても好きだよ」とくり返した。

くり返しながら、やせたアバラのあたりや、しなびた手足の皮膚を、とてもいいもののように、そっとなでるのだった。

まったく変わった女だな、とわたしは思った。

しかし変わった女にしろ、なんにしろ、こんな老人と本気でからだのつきあいをしてくれる女なんか、捜したってそうザラにいるものではないのだ。

「殺されたっていいさ。どうせ長くはない人生だからな」

それから数日後、紅子は身のまわりの物を二つ三つの荷物にまとめて、小梅町のわたしの家へタクシーでのりつけてきた。

それからふたりの生活がはじまったのだ。

ふとん巻きの投薬

いっしょに寝起きしだすとすぐ、紅子はわたしの好みをかぎつけた。

うまいぐあいに、それはまた彼女の好みとも一致するらしかった。

「庇でもかみな」

というのが、彼女の口

グセだった。

じっさい、わたしは彼女に庇をかまされもしたものだ。

わたしの鼻先に、尻をクルリとまくって向こうむきに立つ。

それから、平手で尻のあたりをパンパンと二つ三つたたいてブーッとする。

それから、

「おんじい、くやしかったらしゃんとしてみな」

などと悪たれ口をたたくのだった。

はじめはとうさんと呼んでいたのが、このころは、いつのまにか、おんじい、という呼びかたに変わっていた。

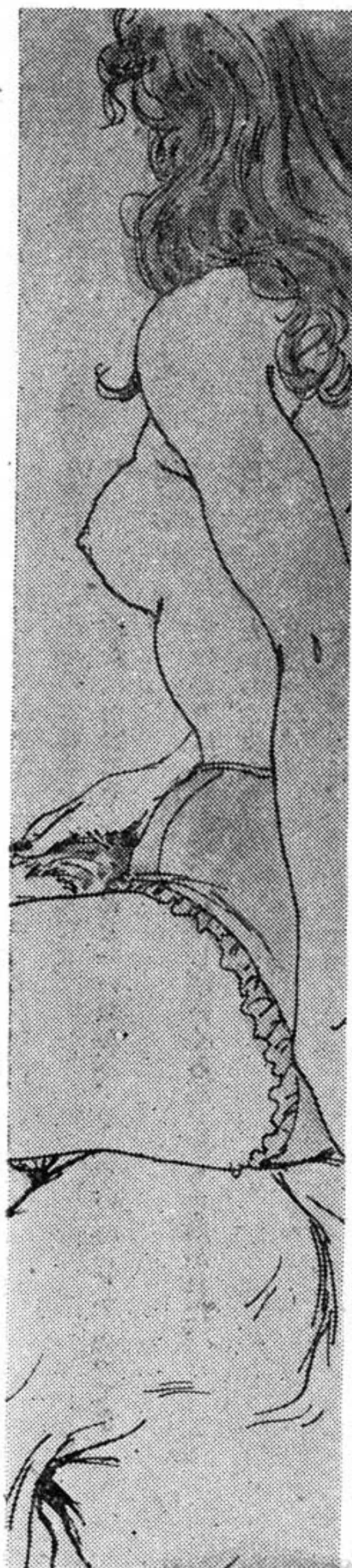
わたしはそうされるのが好きだった。

紅子がわたしをはずかしめたり、バカにしたりするほど、わたしはへんてこなよろこびに酔いしれた。

ある日、わたしはカゼをひいて寝ていた。

たいしたことはなかったので、寝ているうちに、わたしはふと紅子にいためつけられたくなった。

そのことを紅子にいいだすと、



「まあ、あきれたよ、このおんじい」

紅子は大げさにイヤらしそうな顔をしてみせながら、それでもニヤニヤとして腰を浮かせた。

紅子は、横綱の手数入りのまねがうまかった。

すっ裸になると、サロン前かけをちょこんとたらし、よいしょ、と足をひろげて四股を踏む。

大きくまたをひらき、尻が畳につくほど低く腰をおろした姿勢から、ジリッ、ジリッと足幅をせばめ、全身をセリあがらせてゆく。

そんなときの彼女は、

まるで自分が横綱にでもなったように、視線を宙に凝らし、湧き起くる拍手の音をきいてでもいるようだった。

わたしも、そんな彼女をながめるのが好きだった。

まるで女相撲の横綱のように、堂々としているのだ。

それを見ていると、それから始まることの期待で、全身がじいん



とシビれてくる。

それからふたりで、あさましいことのかぎりをつくすのだった。

わたしはふとんに寝たまま、じっと彼女のそんな様子を見上げていた。

そしてからだでオイデオイデをする。

ところが彼女は、わざとゆっくり手数入りをやってわたしをじらせ

る。

いっぺんわたしの寝床のそばまでやってきては、またクルリとむきをかえる。

わたしはたまりかねてのどを鳴らした。

そんなことをなんべんもくり返したあげく、やっと彼女はわたしのところへやってくると、

「よいしょ」とからだをあずけるのだ。

ニクニクしいような、若い女のからだの重みだった。

わたしの腹の上に馬のりになり、両側にふんばった足首がふとくたくましかった。

「この、くたばりぞこないの助平^{すけへい}じいめ!!」

紅子はそういいながら、わたしの顔を真上から見おろした。

それからわたしの首をしめあげたり、両ほおにかわるがわるビンタをくれたりした。

さんざそうやってわたしをなぶったあげく、

「カゼをたたき出してやるからね。まってなよね」

というと、いきなりわたしのからだをコロがして、ぐるぐるとふとん巻きにした。

コブ巻きのようにたんねんにふとんで巻き、その上からさらに帯でグルグルにする。

呼吸ができるように、首だけは出ていた。ミノムシのようなかっこうだった。

からだの自由は、まったくきかなかった。

「さあ、おクスリだよ」

紅子はいった。

そうやっておいて、わたしに投薬しようというのだ。

「ホラ、口をあいて!」

わたしはあーんと口をあく。

その口の中へ、ヤカンの口から水がそそぎこまれる。

そのあとでクスリという順序なのだが、のめいいカプセルや錠剤ではなくて、トン服のような散薬^{さんやく}だった。

その思いきりのみにくく苦いやつが、パツとほうりこまれる。

おそろしく乱暴なのませかたなので、からだの自由のきかないわたしは、うまくそれを食道に流しこめないで、はげしくむせた。

目を白黒するわたしを見おろしながら、紅子は、

「アハハ、アハハ」

と笑いころげた。

笑いながら、その両ももで、ふとんまきになっているわたしの胴をぎゅっとしめあげてきた。

「からだがせきこんでいるのがつたわってきて、とても気持ちがいい」
紅子はそんなことをいった。

冗談じゃない。こっちは死ぬくるしみなのだ。

しかし、紅子にそんな手あらいめにあってるとき、ふしぎと苦痛は甘美な陶酔にすり変わっていた。

「いつか殺される。いつか殺される」

と思ひながら、わたしはいのちをかけたこのたわむれにひかれていたのだった。

心をいじめる

紅子が若い男にげたのも、もとはといえばわたしにたいするイヤ

がらせだった。

紅子はからだでわたしをいじめるだけではなく、心でもいじめた。「このクソったれじじい、クタバリぞこないめ!! あたしがほしいのかい。え? ほしいのかよウ」

尻をまくって、ピシャピシャたたいて若い肉の張りを見せびらかすのは、しょっちゅうのことだ。

わたしは、ニヤニヤしまりのない笑いを浮かべながら、それをだまっで見ている。

すると、紅子はなおもわたしの心をそるように、「あたいが若い男とにげたらどうする? 若い男とどっかでさんさいいことをしたらどうする?」

わたしの顔をのぞきこんでニヤニヤした。

それから急に、女らしいしおらしい語調になって、

「紅子、いけない女なの。とうさんにはわるいけど、紅子もう、とうさんじゃダメなの」

そんなことをいったりした。

みんな、心のムチなのだ。そうやって、ジワジワとわたしをいじめることで、彼女はたのしんでいたのだ。

しかし、それがことばだけでなく、とうとう現実となってあらわれたのだから、わたしもおどろいた。

「あんなことをいってたけれど、やっぱり若い女だ。世間なみの幸福もほしいのだろう。ことによったら、このまま帰ってこないんじゃないかな」

そう思った。

ところが、一ト月めにひょっこり帰ってきたのだから、これはどう

もわたしと紅子の関係は骨がらみのようなものだ。

わたしはうれしかった。

ただうれしかった。

そしてもう紅子を離さないぞ、と思った。

たとえひざの肉がやぶれるようなことがあっても、紅子をのせてどこまでも歩きつづけようと思った。

帰ってきてからの紅子は、いよいよその暴威をつのらせはじめた。

朝はおそくまで寝ていて、わたしに食事の準備をさせる。

お膳だてができたところでフラリと起きだすと、ゆっくりゆっくり時間をかけて、歯ブラシをつかったり、顔を洗ったり、ピン・カールしたり、そしてやっとお膳の前にもすわる。

はてはミソ汁のダシがどうのこうのと文句をたれて、一膳もたべないうちにハシをおく。

そんなときは、ひるちかくなって近所のでんやものをとったりするのだった。

そしてふたことめには、

「だいいじにしないと、また出てゆくぞ。あたいが出ていったら、だれもおんじいなんか相手にしやしない」

とあくたれ口をきくのだった。

だがわたしは、そんなふうにして紅子に老いの身を粉にして仕えることが、しんそこうれしかったのだ。

老人の自画像

日常生活ではそんな無精ったれの紅子だけれど、からだのアソビに

なると、人が変わったようにいきいきとふるまった。
まるで、ふだんたくわえておいた力を、一気にそこで出そうとする
かのようにだった。

からだじまんの彼女は、自分の全身を鏡に映してみるのが好きだっ
た。

裸を鏡に映しながら、

「おんじい、きなよ」

といった。

わたしがそばにゆくと、

「裸におなりよ」

というのだ。

自分の白い張りきったからだど、わたしのしなびた七十歳の肉体
を、鏡の中で見くらべてみようというのだ。

わたしは紅子の考えていることがわかるので、

「あいよ」

といって、着物を脱いだ。

われながら、老いさらばえた肉体だった。

やせて骨と筋が浮きあがり、おまけに、色艶いろつやのない皮膚が黒くくす
んでいる。

「そこにはいいいな」

紅子はそんなわたしを、鏡の前にはわせた。

そうやっておいて、

「よいしょ」

と、わたしにまたがった。

白いゆたかなものあいだから、ミイラのような老人が首をつき出
していた。

天国と地獄——。生と死——。

それはあまりにもきわだった対照だった。紅子はそんな鏡の中の像
をながめながら、

「アハハ、おんじいがある、あたいがいる、アハハ」

と、おもしろそうに声をあげた。

彼女は自分の裸身にまんぞくし、そして、わたしのミイラのような
からだと比較することによって、いっそうその満足の思いをかきたて
られるようだった。

そして、

「おんじい、おんじい」

といいながら、けしかけるようにももをう
ごかした。

「はい、おんじいめ、これにござりまする」
そういいながら、わたしは彼女のものもあ
いだから首を出したまま、ペロペロと舌をだ
してみせた。





それがわたしの自画像だった。
わたしは自分の老いの姿のみにくさに、じ
ゆうぶんまんぞくした。
自分がみにくければみにくいほど、紅子の
白い肉の責め苦が、甘美の度合いをましてく
るからだった。

狂うムチの下で

紅子はどうやら鏡がお気にめしたらしい。
なにかやるときは、いちいち鏡の前にわた
しを呼びつけ、そして裸にさせた。
むろん紅子自身も裸になる。

そうやって、わたしは紅子が若くたくまし
く、自分が掛け値のないおんじいであること
をたしかめてから、しんみり紅子にいじめて
もらうのだった。

そんなことをしているうち暮れになった。
紅子は、正月の予定で胸をふくらませなが
ら、着物をひっぱりだして点検していた。

そんなある日、わたしがとんでもないしく
じりをやらかしてしまったのだ。

彼女のいちばんお気にいりの一越ひとこしの着物に
鍋なべの中の煮汁をこぼしてしまったのだ。

豚のあぶらのとけた汁だったので、たちま

ちでできたそのしみは、容易なことにとれそうにはなかった。

洗い張りなんかに出していたのでは、正月にまにあいっこないし、それに洗い張りに出したからといって、そんな強いしみがとれるかどうかはわからない。

「おんじいの死にぞこないめ!!」

紅子は逆上して、その着物をビリビリに裂いてしまった。

そして、これでことしの正月も、あたしの人生もおじやんだ、というようなことをいいだした。

そのあげくのはてに、たったいま、着物をもとにして返せ、と息まいた。

「あたらしいのを買ってやる」

わたしがそういつてなだめてもダメだった。

あんな氣にいった柄は、もう捜そうとしたってない、というのだ。

「えい、このおんじいめ!!」

いきなり、彼女がさけんだかと思うと、風を切って灰皿がとんできた。

反射的に首をすくめたので、それはわたしの耳のあたりをかすめとび、柱に音をたててあたると、畳の上どころがった。

しかし灰や吸いガラがあたりいちめんに散乱した。

「ゆるしておくれ、紅子」

そのけんまくにおそれをなしてわたしは畳の上にはいつくばった。

「おんじい、あやまれ!!」

と紅子がいった。

「だから、あやまっているじゃないか」

「そんなことじゃダメだ。こうしてやる!!」

紅子はそばにあった

メートル尺をにぎると、いきなり立ちあがった。

わたしは思わず目を

つぶり首をすくめた。

紅子がそれを振りかぶるところは見えなかった。

しかし、空気がぴり

ぴりッとして裂けるような

異常な緊迫感がわたしの皮膚をおそった。

次のしゅんかん、

「この、おんじいッ!」

ぴしりとそれがふりおろされ、背筋のあたりに火のような細く鋭い衝撃がはしった。

「あッ、紅子ッ」

わたしは肩口をおさえて、畳の上にのめった。

よけようとすれば、よけられたのだ。

しかし、ふしぎなことには、わたしはそれをよける気はなかった。

むしろ、つづく第二撃、第三撃を待ちのぞむ、痴れたようなものが

肉の奥底でうずいているのだった。

ムチはつづいて振りおろされた。

風を切る音と、それを振りおろすとき紅子のくちびるからもれる、

タコ!! 女性の間で引張る女性用品の豪華景品

- ◆女性の間で引張りタコ **愛玩コケシ** 大七〇〇円 中六〇〇円
- 小五百円(代金引換各百円増)湯又水に浸るとやわらかくなり、水を切ると自然と硬くなり、スポンジより感触よく、汚れは石鹸で奇麗
- ◆インボ早漏 **サンクイン** 代引八百円 精力減退即効
- ◆性器短小の **真空増大器** 代引二百円 方はプラス
- ◆風流紳士愛用 **肥後ずいき** 七種類 九州名産贈答に
- ◆従来の品にサラ **スポンジスキン** ザラを快感百%
- 二打六百円(代引百円増)
- 東京都中央区日本橋室町三の二 振替東京八五四八八番 明星社

「えッ」

というような声がきこえた。

それと、肌をかむ衝撃は、ほとんどいっしょに感じられた。

したたかな、小気味のいい衝撃だった。

わたしは、

「あッ」

「むッ」

と、そのたびに全身をよじらせながら、

「お芝居の老人みたいだな」

と思った。

わたしはたたかれながらも、紅子がやりがいのあるように、わざと大げさな身ぶりですれにこたえていたのだ。それと同時に、なんともいえない奇怪な満足感が、しびれた五体からこみあげてくるのだった。

紅子はまだムチをふるっている。

が、その目にはすでに逆上のかわりに、いままでとはちがった恍惚の表情があらわれていた。

それが、無言のうちに、しっかりふたりの心と心をむすびつけていた。

暗黙の和解は成立していた。

ただ、ムチうち、ムチうたれるよろこびに、痴れている心がそこにあった。

「ああ、これで、ことしも暮れる」

わたしはムチの下で考えた。

師走のこぼれ日が、うすらつめたくさしこんでいた。

世界からMSの夢をあなたに運ぶ泰西出版資料

本社は海外 35 社の作品 12,500 点を独占輸入しています



10月特別輸入 (GPシリーズII)

①鞭打たれる男 (WHIPPED) エネグ画・文

名匠エネグが描いた最新作。ヘルガは捕虜をもてあそび、いたぶるのが楽しみだった。これはヘルガの日常を描くマゾヒスト向きの傑作です。 解説とも全10章 6500円

②屈従の道 (WAY TO DISCIPLINE)

ドンナ・ブレーネ作画

美女メアリのたどった、こらしめとムチと責めとの半生を生き生きと描くすばらしい画集。第1巻24章6000円、第2巻24章6000円 (全48章11000円)

募集

①MS男女モデル各2名急募
②らぶらた勤務員男女を問わず2名。いずれもリレキ書、写真同封して本社国内係へお申し出ください。

このほか、あらゆる傾向の資料が輸入されます。詳しくは送料50円同封してお申し越しください。

泰西出版資料会社

横浜本社——横浜市中区北方町1の67電話(20)9313
東京出張所(コーヒー部)——ら・ぶらた
渋谷区上通り3の28(スカラ座すじ向かいのタバコ屋のヨコ入って右側)

れ 臀 の マ ダ ム

ミッシェル・クレール
高 槻 珠 子 訳

血とあぶらで光る鞭

パリのモンマルトルに巣食っている伊達男どものなかに、バロン（男爵）と呼ばれている青年がいた。

この貴族的な風貌をしたたくましい美青年は、その体内に流れている血は、純粹のゲルマン民族のそれで、ドイツの大都ベルリンに生まれて育ち、今次大戦後、東ベルリンを犯した赤い思想の波をのがれて、放浪の旅に出たが、ついに二年余り前、パリへもぐり込むと、モンマルトルに居着いてしまった。今ではすっかりモンマルトル一帯の無頼者一派の兄貴格におさまって、男爵という呼び名は鳴り響いていた。

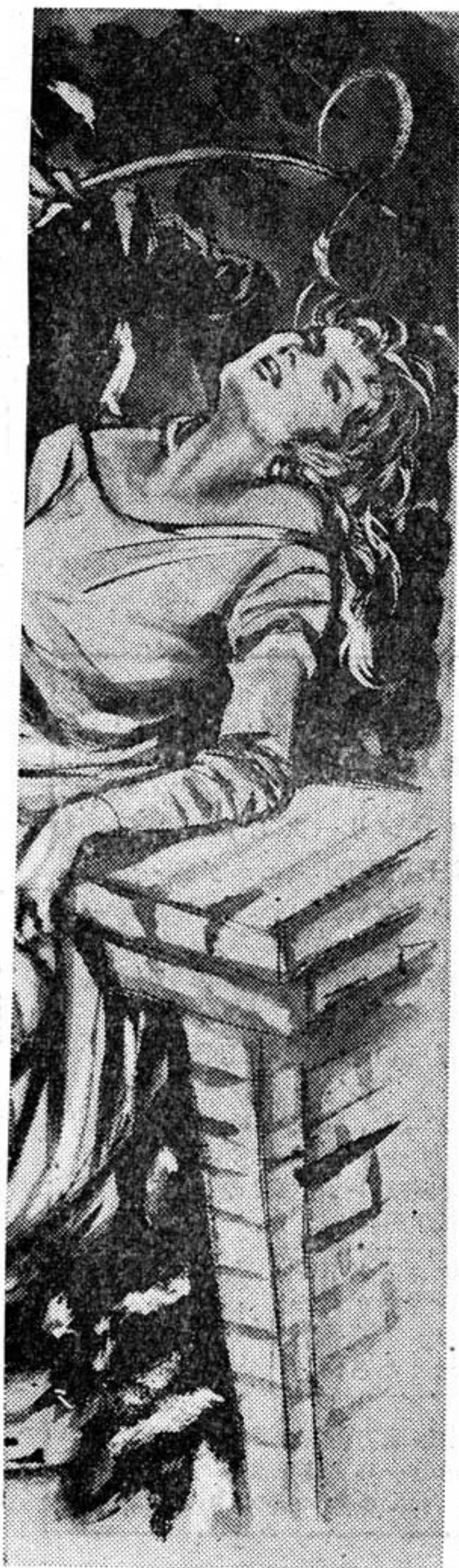
そんなふうには、パリ男たちを手下にしたがえていたばかりではなく、かれの貴族的な容貌と実力にまいて幾人かのパリ娘たちも犬のようになびき伏していた。

しかし、残念ながらその娘たちは、いずれも別嬪とは言いかねる部類であった。男爵はそれが不満だった。それで年じゅう女をあさり暮らしていた。

キャートルズ・ジュイエ（パリ祭）が近づくころ、男爵は腹心の手下のエドモンの口から「血まみれ臀のマダム」のことを聞いた。

初夏らしい暑い日だった。

男爵はこづかいせんがほしそうなエドモンを追い帰すと、このところ定宿としてゐるリュ・ジラードンの安ホテルを出て、モンパル



血まみ



犬のように四つんばいになり、バラの枝のトゲがとれるまで男に尻を打たれ、あえぎ、もだえながら、被虐に陶醉する美貌の年増女ノ

ナスへ向けて車をとばして行った。

「血まみれ臀のマダム」を、聞くそうそう尋ねて行く男爵^{ベロン}なのである。

だが、その異名を持つ婦人の住まいは、ひどくわかりにくい場所にあつて、かれは何度も地下鉄ババン駅のあたりを車でさまよった末、やっと裏町の薄暗い路地の奥にある古い五階建てのアパートを見つけたでいた。

門番^{コンサージ}の姿がなく、それをかえっていいことに、男爵^{ベロン}はさっさと五階へ上がって行って、北側3号室のドアをノックした。

ドアはすぐ内側へ引かれて、驚くほど美しい金髪の年増女^{としま}が姿をあらわした。金髪をさらりと肩へたらし、すんなりとした肢体だが、胸や臀はその肉が豊かそうだった。

「お尋ねただいて光栄に存じますわ」

と年増美人はしとやかな身ぶりで、男爵^{ベロン}の手を取って部屋の中へ招^{しょう}じいれた。おびたらしい鞭が壁^{かべ}に陳列されていた。どれもみな血とあぶらで光っていた。

ロハじゃごめんよ

彼女はブドウ酒を運んで来て、二つの杯にそれがなみなみと満たされるのを待って、まづふたりはおのおの自己紹介をし、そして乾^{かん}杯^{はい}した。

「血まみれ臀のマダムと呼んでくださってもけっこうですわ。……でも、長ったらしくて

不便でしたら、どうかカトリヌとお呼びくださいまし」

と、「血まみれ臀のマダム」ことカトリヌ・マルカン夫人は言った。

だから自己紹介といっても、単に名まえを言うだけの簡単さで、男爵と来たらただひと言、

「オレは「バロン」さ」

「では、バロンさん、今度はあたしのお臀をご紹介しますわ」

飲みほしたグラスを置くと、美しいマダムは立ち上がって、裾のひらいた水色のスカートをするりと落とすと、パンタロンもキュロットもつけていないそのからだは、たちまちまっ白い豊かな臀部を男爵の前にさらけ出した。

ふたつの形のいい球形の隆起が、まっ白色で、ぱっと男爵の目を打っていたが、しかしよく観察すると、その盛り上がった臀肉のところどころに、薄青く鞭あざが残っていた。

「お気に召しまして？」

と、マダムは顔をねじって、男の表情をうかがいながら、ほおをほんのりバラ色に染めていた。

「いい臀だ。ところでマダム、この臀を血まみれになるまで鞭で責めるには、いくら金がいるもんかね？」

するとマダムは法外な値段を言った。

「この白ブタめ」と男爵は毒づいた。

「いなか者に吹っかけるような料金を言いやがって！ こうしてやる！」

柔らかな臀肉をかれは、力いっぱいつねりあげた。

「なんというむちゃな！」

カトリヌは、心から腹だたしげに叫んで、がっしりとつねられている臀を振りほどこうとしてもがいた。

「今までにいろんな国の客が見えて、お臀打ちを楽しんで行っているけれど、お金はみんなきれいに払ってくれる紳士だわ！ だのにこのドイツ臭いむちゃな人たらっ！」

「いかにもオレはドイツ人さ。それもヒットラーの孫かも知れねえ。フランス女にやもと優しくできねえのよ」

と男爵は笑いとばした。かれのポケットには一文も用意がなかった。つまりこの男は、最初からロハでなぶりものにする気で来たのだった。

「憎いドイツ人！ お臀を、離してちょうだ

い！」

マダムは脚をバタバタさせてもがきつづけた。爪が立ってもう臀肉が赤かった。じつにおそろしい男爵の指の力だった。

じりじりとカトリヌのからだは引き寄せられていって、やがてソファの上にうつ伏せに寝かしつけられた。

片臀は猛烈につねり上げられたまま、片臀にはまた猛烈な平手打ちが見舞った。

マダムは悲鳴をもらすばかりで、もう観念したと見えて、じっと動かず、なぶられるままになっていた。

初夏らしい日の光が、また強く窓のカーテンに当たって来て、五階のこの室は非常に明るいのだった。

その明るさの中で、壁にずらりとならんでいる皮鞭は血とあぶらの光沢を浮かべていた。

やがて、その皮鞭の一本が壁を離れると、すさまじい臀打ちの響きが、明るい昼の室の空気をつんざいてたちだした。

悲鳴と臀肉の響きの、その絶えまない二重合奏だった。

男爵が3号室のその部屋を出たのは、薄暗くなったところだった。

バルザックの銅像やカフェ・ドームなどがあつて名高いブルバール・デュ・モンパルナスは、早くもその多彩な電飾広告をきらめかせだして、廊下の窓からほんのりそれが映ると、男爵はシマのモンマルトルに帰ってどこかの酒場で酒をタカリたいものだ、のどを鳴らした。

のどを鳴らして大またに廊下を歩き出そうとすると、

「バロン……待って」

と、カトリーヌが、血まみれ腎のまま、よろよろとドアをあけて追いついて来た。

「四階の階段まで送って行くわ……」

そう言つてマダムは、さも愛しい男のように男爵の頸筋や鼻や、そして終わりにそのくちびるに熱い接吻をした。

ボウ・ギャルソン（美青年）とつぶやいたり、わたしの愛人と小さく叫んで、男爵のたくましい腕にすがって離そうとしなかった。

男爵もまた軽くアンブラッセを返した。

そうしていると、小さなかわいらしい娘の子が突然廊下をやって来て、

「ママン、お腎を出したままで、みっともないことよ」

と言いながら、カトリーヌの手に甘えつい

た。カトリーヌは、その自分の娘をしっかりとけて部屋にはいらせると、どうしても四階まで送って行くと言つてきかなかった。

「かつてに送って来るがいいさ」

そうしてかれは、四階まで血まみれ腎と道行きをして、そこでもう一度アンブラッセをして別れ合った。

森の中の腎打ち

男爵はその後にも相変わらずリュ・ジラードンの安ホテルを定宿にしてい、浮気女の尻を追いかけて、あるいはむこうから追いかけられたり、おもしろおかしく暮らしていた。

七月十四日がいよいよ迫つて、パリは景気がよかつたし、男爵のふところもその余恵にあづかつて、このところインチキ・ルーレットにひっかかるカモが多くなつていた。カモが吐き出した金を、仲間で分け合うのだが、兄貴格の男爵は、その分けまえが倍もあるのだから、いっそうこたえられない次第だった。

モンパルナスの「血まみれ腎のマダム」の美しい金髪の容貌と、みごとな腎部とを、かれはけっして忘れてしまったわけではなく、

あの激しい腎打ち遊戯のおもしろさは、たえず胸によみがつていた。

それなのになぜ、かれがカトリーヌのもとへ車をとばして行かなかったかと言えば、モンパルナスは近ごろグレン隊が結束して、モンマルトルの男爵たち一派と、おもしろくない空気を生んでいたからだ。うかつにはあつちへは足が踏み込めなかった。

そこで男爵は、たまたま、大変熱心に電話帳をくくつて見たが、あいにくなことに「血まみれ腎のマダム」のアパートには電話がないようであった。

電話で連絡して、マダムを自分の宿に呼び寄せて、あの白い形のいい腎をまた口で鞭打ちしたいかれのムシのいい考えなのだが、電話がだめとなると、手紙を書いて連絡をつけるよりほしかたがなかった。

男爵は頭をひねりひねり、たどたどしい筆で、

「ボクの愛人よ。どうか寂しがっているボクのもとにやって来てほしい」

そんなラブ・レターまがいの文句をモノして送りつけたが、さていくら待ってもカトリーヌは現われず、返事のハガキも来ないしまつて、男爵は自尊心を傷つけられて、はな

はだおもしろくなかった。

ところがある日のこと、男爵が地下鉄ヨーロッパ駅の近くを通りかかると、その地下鉄出入り口から、ぞろぞろと上がって来た降客の群れの中に、背がすんなりとして、めだって美しい金髪の婦人の姿が目に入り、確かに「血まみれ臀のマダム」なのだった。そのとたん、男爵は車をターンさせて、歩道をゆっくり歩いて行く彼女の横に並行させた。

マロニエの木の下で、カトリーヌは横の不審な車に視線をやると、たちまち、

「まあ、あなたなの——」

と深い青いひとみをみはっていた。

「わかったら、さあオレの車に乗んな」

と男爵はあごをしゃくった。「ええ、乗せていただいてよ」



カトリーヌは白いもものをのぞかせて、助手席に乗り込んで来ていた。

小一時間車をとばして、ブルノワ郊外の国有林の中へ、男爵はカトリーヌを連れ込んだ。

広い静かなその森林の中には、日当たりのよい青い草原もところどころにあって、鳥のさえずりや、花のおいもおおるのだった。「なんというすばらしい所でしよう……」

カトリーヌは美しい顔を上気させて、胸深く森林の甘い空気を吸って草の上に立った。森の緑と彼女の金髪の色があざやかに映えた。

東洋式なすわりかたで草にすわってシガーに火をつける男爵の目のまえで、カトリーヌはコーヒースカートをおりし、キュロットを脱いで、白い臀をまる出しにした。

「こんな草原で殿方にお臀をご披露するなんて、はじめてだわ……」

彼女はかなり恥ずかしそうな風情だった。思いがけずぴっちりとして、てれ隠しのようにもろ手は長い金髪をいじっていた。が、男爵の毛むくじゃらの手で、柔らかな臀たばをぴしゃぴしゃとたたかれましたと、彼女はすっかり臀筋肉をゆるめ、みずから苦痛を倍に

させた。

もろ手で樹枝を握ってたたかれていた。

その姿はちょうど神様に祈るにも似て、全く敬けんな受刑の姿態であった。静かな森林の空気に、そうして激しい平手打ちの音は響き、マダム

・カトリーヌの自慢の臀はいちめん炎症の濃紅色を帯びだしていった。

「あんまり赤くしてしまつたら……鞭で赤い横縞を作る楽しみがなくなることよ」

と、カトリーヌは苦痛のあえぎのうちに、男爵の悦虐のために忠告していた。双臀ともただれたように赤く、また一方、男爵の手のひらも赤く変わって痛むほどの猛烈な平手打ちなのだ。

カトリーヌが握りしめていた樹枝が、しなうだけしなうて根元から折れ落ちると、そのはずみに、彼女のからだは前伏せにころがり、それを潮時に男爵は、

「休憩だ」

と手を休めて、新しくシガーをくわえた。しばらくの間、あすこに見える小池の水でお臀を冷やしてほしいとカトリーヌは願っ



た。

「だって、これもあなたの鞭打ちの楽しみのためよ。……あたし、お池から帰るとき、すばらしいお鞭を取って来ますわ」

とナゾみたいなことを言って微笑を残し、その赤い臀が揺れながら森の奥の青い小池のほうへむかって行った。

小池はわき水で、とても冷たかったが、カトリーヌは、その冷水にたっぷり臀部を漬けて、ほぐれた髪を整えながら、小鳥の声に聞き入り、甘い花のおいをまた胸深く吸っていた。すると、いつのまにか忍び足で男爵が近づいて来ていて、彼女をおどろかせた。

かれのくちびるはカトリーヌのえり足に接吻をし、また彼女の耳をかんだりしながら、彼女が自分の手紙に対して返事をよこさなか

ったことを、またしてもものしるような調子で責めだした。

「車の中であれだけあやまつたのに……」

カトリーヌはもう言うことがなかった。

「わたしのアマン……このとおりお臀にぞんぶん刑罰を受けているじゃないの。愛人！」

「コション(豚)！」

かれの手が臀にとんで水しぶきが上がった。

「早く鞭を取って来い！ この美しい牝ブタめ」

カトリーヌの言うすばらしいお鞭とは、トゲのびっしりついたバラの枝なのだった。その趣向は男爵も気に入った。ふたりは協力してバラの枝を幾本か刈り取ると、再びものの陽光明るい草原に戻った。

男爵は四つんばいを命じ、カトリーヌは青い草の上に犬のように四つんばいになって、臀を高くかかげ、トゲつきの枝が痛烈にそこを打つのを待ったが、とにわかに、

「……ドイツ人……ああ、あなたは憎いドイツ人なのね……！」

何を思い出したものか、マダム・カトリーヌはそう小さく叫ぶと、小娘のようにおんおんと泣きだしたのだった。

悲情な思い出

今次大戦中、周知のとおり、フランスは一時ドイツに屈服してドイツ軍政下におかれたが、そのころ、カトリーヌは二十歳で、ソルボンヌ大学在籍のかわいく美しい知的な娘だった。彼女のただひとりの肉親であった兄のマルセルも、ソルボンヌ大学の卒業生で、パリ銀行に勤務していたが、フランスがドイツに降伏すると、抗独地下運動に加わって、さかんに活躍し、ドイツ情報軍および憲兵軍のきびしい追及を受ける身になった。

徹底的なかれらの探索に、ついに行き場を失ったマルセルが、ある晩、雨にまぎれて妹の待つわが家へ忍び戻って来ると、町内じゅうに網を張っていた猟犬のような憲兵軍の一隊が、たちまち踏み込んで来て、泣き叫ぶカトリーヌの前で兄をリンチし、半死半生にしたうえで連行して行った。自殺もできない仕組みのなかで、やがて銃殺されるにきまっていた。

ところがそれから五、六日して、将校一、兵二、の情報軍の一班が、不幸に沈んでいるカトリーヌを訪れて、一枚の書類をひらひら振って見せびらかし、将校が言うことには、

これは兄マルセルの釈放嘆願書で、妹のおまえのサイン一つで有効となって、マルセルは明日にでもこの家に帰ることができると。

兄の生命がこの情報高級将校の手心一つにかかっていることを知ると、それは同時に自分が貞操を捨てねばならないことだということを、カトリーヌは悲しく了解した。

カトリーヌのきれいな部屋には、その晩はバラの花が枝ごと花瓶にいけられていて、深いかおりを放っていた。

ふたりの兵士は部屋の灯をいっぱい明るくし、将校の命令で、カトリーヌはそんな明るさの中でセーラー服のスカートを背中までたくし上げて、まずそのふくよかな形のいい臀からむきだしにして、三人の獣的な視線のなぶるままに展覧せねばならなかった。

バラのトゲの枝が、その羞恥に震える白い裸臀を容赦なく激しく打ちすえだしていた。

トゲが臀肉に突き刺さり、あるいは飛び散ってしまっても、まだ裸の枝で、三人は交替で美しいパリジャンヌの臀を責めつけて興じた。

それから非情な愛欲の行為があつて、床に倒れて動けないカトリーヌの胸の上に一枚の書類をのっけて、三人は帰って行った。

好きな人に贈る!!

大人の珍本 送共 千四百円

大人の写真 送共 五百円

書画目録 30円封入の方に送る

東京都新宿局64号(イ) 愛好堂

三人が帰ってから夜が白々と明け放って行ってもまだ、彼女はすすり泣いていた。

「男爵……その書類は何だったと思う?」

と青草の上に犬のように四つんばったまま、マダム・カトリーヌは泣きながらそう言つて、どうやら自身の悲しい事件を語り終えようとするようである。

男爵はマダムの片臀に、バラのトゲを一つ突き刺した。

「おお、……ねえ、何だったと思つて?」

「胸のすく話だな」

と男爵は薄笑つて言った。

「この臀を最初にドイツが責めたとはな」

「まじめに言つてみてよ」

「オレにやわからねえよ」

男爵は立ち上がつてバラの枝をふりかぶつ

た。

「さ、血まみれ臀になるまで、たっぷり打ちのめしてやる！」

森の静寂をカトリーヌの悲鳴が破った。

刈り取って来たバラの枝が、すべてトゲが飛び散ってしまった裸枝になり果てると、カトリーヌは臀全体から血をしたたらしなから、再び小池のそばに行き、新しくバラの枝を刈り取って来て男爵に渡し、かれの手がトゲで傷ついているのを知ると、口にふくんでツバをなすりつけて手当をするのだった。そして、

「さあ、続けて打ってちょうだい」

とまた犬のポーズを取って、血まみれの臀に酷烈な責めを誘うのだった。

過ぐる昔、さんざん慰み物にした自分の胸の上にドイツ兵がのっけて去った一枚の書類は——兄マルセルの銃殺刑による死亡通知書であったことを、カトリーヌは森から帰って行く途中で、男爵に告げていた。

だが、男爵はきわめて無表情にハンドルをあやつっていた。ある意味でカトリーヌは、かれのその冷たい横顔に、再び「ドイツ人」を確認したといえそうだった。

男爵は、モンパルナスの区外でカトリーヌ

を車からおろしていた。用心深く、決してモンパルナスへは近寄ることをしないかれであった。組織化したグレン隊の一派に見つかったら、たちまち撃たれるだろうけんんなモンパルナスは遠くうかいして、帰って行くのである。

キリ刺しの折檻

男爵の二度めの手紙がカトリーヌのもとに配達されたとき、彼女の部屋には客がいた。

その客はつい今来たところで、カトリーヌはブドウ酒をすすめていると、門番がドアをノックして手紙を渡した。

「エドモン、バロンからの手紙だわ」

カトリーヌは意味深く笑って言った。

「彼氏、わりと甘ちゃんなのか知ら？ ほほほ、あなた読んでごらんなさいよ」

これも意味ありげに笑っているエドモンの手に手紙を押しつけると、カトリーヌは、サフラン色のスカートを脚に落とし、キュロット一つの腰をぐっとエドモンの前に突き出して、金髪をゆさゆさとさせて、臀を振り立てて見せた。それはちょっとたまらない扇情的な身ぶりだったから、エドモンは、ラブ・レターまがいのへたくそな男爵の手紙を投げ出

して猿臂をのばし、カトリーヌの臀をすっかりむき出しにさせて二、三発たたくと、

「もっとふれ。もっとふれ」

と口拍子を取った。

「エドモン……」

カトリーヌはこんなかぎりに臀をふりたてながら、

「バロンのやつ、なんと書いていて……？」

「おまえに会いたいとよ。モンパルナスはおかなくて出て行けねえから、おまえのほうからやって来てくれ、とよ」

「バカな、あのドイツ……！」

白い臀をふりたてて彼女は笑った。

「今にやつはしびれをきらして、自分のほうからやって来るさ」

とエドモンもいっしょに笑うのだった。

「エドモン、きょうは泊まって行ってちょうだいね。そして、たっぷり臀責めをお願いするわ」

言われるまでもなくエドモンは、久しぶりに自分の情婦のもとに来たのだから、徹夜で徹底的にこのカトリーヌの美しい臀部を責めあげるつもりであった。血とあぶらの光沢を浮かせて、壁にずらりとかがっている皮鞭も帆柱を巻くのに使う部厚い水牛皮の鞭を使う

腹でいた。それで打つとさすがのカトリリーヌも、たまげるような悲鳴をあげて、のたうちまわるのだった。バラの枝などの比ではなかった。

だが、その水牛皮の鞭で、血染めにするにはまだ惜しい白い臀部だったし、まだ早い午後の時刻だった。

臀ふりダンスの次に、カトリリーヌが皮張りのソファの上にヒキガエルのように両脚をひらいてうつ伏せになって、エドモンからキリで臀肉を突つかれてうめいていると、ひとり娘のサミイが学校から帰って来た。

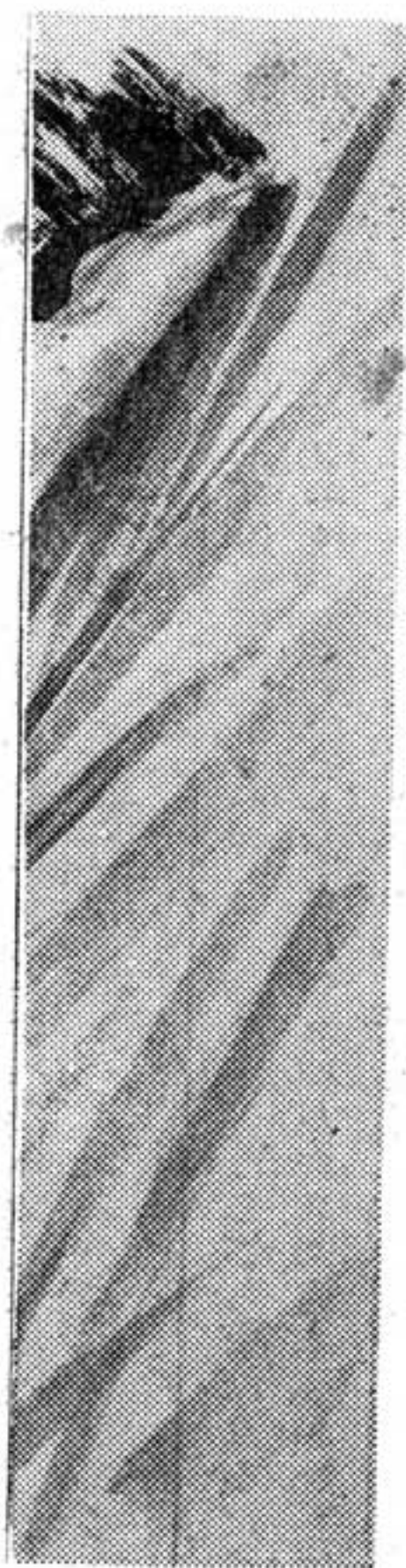
「おお、ママン、かわいいそうに！」

「サミイ、早くお部屋にお行き……」

痛みにあえぎつつカトリリーヌが言うと、

「ノン、ママン、おやつのケーキを作ってくれなくちゃいやよ」

「……だめよ。ママはエドモンのおじさまから、お臀を折檻せいかんされているのだから……」



「カトリリーヌ」

キリを抜いてエドモンが言った。

「娘におやつを作ってやんな。いつ見てもりこうそうな娘だぜ。大きくなったらこの子もまたソルボンヌ大学に行くことだろう」

「かまわなくてよ、エドモン……」

とカトリリーヌは言ったが、許されると、いそいそと娘のそばに行つて、その金髪の小さな頭を愛撫し、そのほおにアンブラッセをし、キチンでケーキを作りにかかった。

出来たてのケーキを手握って、すっかり

きげんよくサミイが室を出て行くと、

「しようなない子。……ごめんなさいね、エドモン」

とカトリリーヌはまたスカートを脱いだ。そして、エドモンの髪と肩にアンブラッセをして、もどおり皮張りのソファの上にヒキガエルのようにはいつくばって、再びそのやわらかな臀肉を、ところかまわず鋭いキリで突

きまくられて

涙を流してう

めきだした。

張り裂ける

ような悲鳴が

何度となく彼

女の口からほとばしっていた。

そのうち日が暮れてくると、娘のサミイが帰って来て、カトリリーヌは傷ついた臀をレモン色のスカートで隠し、サミイとエドモンのために晚餐ばんさんのしたくにかかった。

ブドウ酒と前菜、次いで彼女の自慢のリエットリエット（ブタ肉の油煮）やエビのサラダ煮などの料理が食卓をにぎわしたが、カトリリーヌはブドウ酒を口にふくむばかりで、エドモンと娘がうまそうに食べるさまを、はたで微笑を浮かべて見守っていた。

このあとにひかえている苛烈かれつな皮鞭の臀打ちに備えて、一片の食物も口に入れることをしないカトリリーヌだった。

燃える消毒液責め

彼女のこの部屋は、ほかに小さな小部屋が二つあって、その一つはサミイの小部屋、あと一つは彼女の寝室であるが、その寝室こそ彼女の秘密ひみつとしてゐる本格的な受虐じゆぎやくの部屋であった。

かつてどの客も、また男爵バロンも、まだここに迎え入れられたことはなかった。

その室をカトリリーヌは、

「エドモンとわたしの部屋」と呼んでいる。



「お待ちとお
エドモン、や
っと、眠った
わ」

サミイを寝
かしつけて、
カトリーヌは
そのふたりの
部屋にはいっ
て来た。

エドモンは
水牛皮の広い
厚い鞭を肩に
掛けて、その
ひとみは加虐
の火を燃え立
たしていた。

「その水牛皮
は、とっても
こたえるわ
よ……」
「ぐずぐずす
るな」

とエドモン
は叱った。

「ごめんなさい」

カトリーヌはすぐスカートを落としたが、
エドモンは上着も取れと命令して、カトリー
ヌは濃艶な全裸の姿となった。身につけてい
るものはただ黒い靴と、そして肩になびいた
わわな金髪だけのまっ白い裸形は、エドモン
の前にひざまずいて、かれの裸の足にくちび
るを押しつけ、永遠にかれの奴隷であること
を誓うのだった。

彼女は顔を上げ、白い胸で手を合わせて、
神に祈るがごとく、その誓いを何度も繰り返
した。

二本のレールが急傾斜状にさし渡された。
木馬風な奇怪な石積みきばふうの台があり、二本のレ
ールの下に、舟形のビデがすえられている。
その構造物は、エドモンが考案した臀打ち台
で、誓い済ましたカトリーヌは今、その二本
のレールの上に、白い裸形をまたがらせるの
である。

レールは深く前へ傾いているから、カトリ
ーヌの上半体は低くなり、反対に下身はいやお
うなく高くなって、四肢は裂けるほどに開き、
臀部は割れて高々と突き出るのだった。

「エドモン、お臀を鑑賞するのはあとにして
早く鎖でからだを巻いてよ、じゃないとわた

し、すべり落ちそうだわ——」

その臀がぴしゃぴしゃとたたかれました。

「おお！ エドモンの意地悪——」

と言う間に、カトリリーヌのからだはなめらかなレールの上をすべり落ちて、花模様の壁にしたたか背中を打ちつけてころがった。ひどい人……とこぼしながら、また高い臀打ち台に苦勞してよじ上って行く美しいマダムカトリリーヌなのだ。

重い鎖がしっかりと巻きついて、彼女の両腕はレールをかかえた形となり、腕の部分は血行がとまって白く変わった。

もう、どんなに臀を打たれても、すべり落ちることはない。

天井からタンクが吊るされ、そのコックのところからゴムホースがたれさがっている。が、エドモンは、そのホースの口をちょうどカトリリーヌの臀の真上に持ってきた。

タンクのコックをひねると、強度のアルコール液に塩と東洋カラシを調合した残忍な傷消毒液がホースを伝って落ちて、カトリリーヌの臀をぬらし、下のビデへしたたり落ちて行く仕掛けなのだ。

皮鞭が臀皮膚を破り、傷つけてゆくと同時に、その生々しい傷口へ、容赦なく猛烈な溶

液がしみ込んで燃えるばかりにしみて、これ以上に苛烈な臀責めはなかった。

エドモンはコックをひねり、水牛皮の鞭をふりかぶった。

「エドモン、わたしの口に猿ぐつわを——」とカトリリーヌは願った。

「殺される牝ブタのように、泣き叫ぶがいい！」

エドモンは力いっぱい鞭をふりおろした。「おお！——ウムムム……」

アルコール液があたりへしぶいていた。一打ちですでに臀皮は破れたものか、白い臀肉はみるみるまっかに色づいて燃えただれた。

冥土へ行きな

マダム・カトリリーヌの室には、その日、夜に入って客があった。背広のえりを立て、そのうえシャツポを目深くかぶったその男は、男爵であった。かれは、猟犬に追われている野ウサギのようにおどおどとおびえながら、3号室のドアをたたいていた。娘のサミイがドアをあけた。男爵はきぜわしく中にはいて、自分でドアにカギをおろし、それから、「ママンは留守なのか」と娘にたずねた。娘はものにおびえたふう

飛び出す／＼ノー・イン・ティン・ショー

★今迄誰も手がけなかった女性の秘密をあます所なく描き出したステレオ界前代未聞のスパリボーズ。つたつたに映るわが国に引しまった魅力のモミキ。つとくびれたたまらない見えてはならない禁断の神。戯地を思わすふりつきたいステレオの魔力。情事に身をくねらせ泣く身も心もどろける様なセクシーモードの体当り演技。男子禁制のまばゆいばかりの桃源境を貴方の眼前で再現。他秘密撮影演出。撮影等各種豊富。今評判のステレオも大半が雑誌の口絵写真程度ですが本品は当会員の特別頒布品の中よりや、平凡な物を選んで一級分譲す。本品お買上げの方は準会員とし、特典あり正会員は準会員中より贈送し個人的ご希望に必ず市販のステレオに不満の方始めの方のせひ当会にご加入下さい。

7組入千円 20組入二千円 40組入三千円

右は特殊眼鏡一台付千共の価格必ず書留にて登録ナシ会員の皆様へ。長い間迷惑をおかけ致しました。此のたび漸く営業停止期間が過ぎましたので。新しい新たに発足致しました何卒引き続き宜しくお願ひ致します。従前通り会員特報隔月発送。通信は必ず私書宛え。大宮局私書函第二十三号。(ステレオクラブ改め)ステレオ趣味の会

に黙ってトイレのほうを指さした。

「バロンだ。あけな」

とトイレの前でかれは言った。すると、中からカトリリーヌの声がした。

「まあ、バロン？……あたし、すぐにここを出ますわ」

「あけるんだ」

「……………」

ドアはひらかれたが、カトリリーヌは便器の上から腰を上げていて、きれいな緋色のネグリジエ姿でかれを迎え入れた。

「待ってたのよ。よく思い出して来てくれたわね……」

「この美しい子持ちの牝ブタめ」

男爵は歯がゆそうに言った。

「なんとトボケたあいさつじゃねえか。このオレがあんな手紙をやったのに、一度だって出て来ようともせず、返事もくれねえのはどうしたわけだ。よく思い出して、だど？よくもそんなトボケたセリフが言えたもんだ」

「ああ、あたしの大好きな愛人！ そんなにおこらないで！」

カトリーヌは男爵のたくましい胸にしがみついて、その顔に接吻の雨をふらせた。その愛情の表現は、男爵の心を大いにまどわせた。

なんてえたいの知れない女だろう、まるでプロシヤの政治みたいだ、と思うのである。

「バロン、接吻よりも、お臀を出すことが先でしたわね……」

カトリーヌは、妖美に笑って言った。

「さあ、外へ出ましょう」

サロンのピアノの椅子に、娘のサミイはまだすわっていた。寝室に行くようにカトリーヌはしかけたが、サミイは寂しげに動こうとしなかった。それを見ると男爵は、壁の皮鞭を手にとってふり上げ、サミイを威嚇した。とたんにサミイは寝室へ逃げ込んだ。

乾いた激しい鞭打ちの響きと、ママンの悲

鳴は、壁越しにサミイの耳にとどいた。しかし、やがてそれは聞こえなくなった。彼女は眠ってしまったから。だから、男爵が帰って行くのも知らなかった。

「泊まって行きたいが、そうはいかんだ」と男爵は言った。

「夜が明けたらヤバイんだ」

「おなごり惜しいわ……」

血まみれ唇の姿でカトリーヌは言った。

ほんとになごり惜しげな様子で、彼女は熱いアンブラッセをするのだった。

この美しい年増女は、やっぱりオレ様にまいていやる、と男爵は確認した思いだった。プロシヤの政治みたいに、決してえたいの知れないものではない。

そんなウヌボレた気持ちで3号室をあとにしてアパートを出ると、付近に停めていた自分の車に男爵はあたりをうかがい見ながら、おびえるノウサギのように身を入れると、

「待ってたぜ。冥土へ行きな」

と言ううしろからの声は、手下のエドモンのしゃがれ声で、

「な、なんだと——?!」

そのせつな、消音拳銃がひくい発射音をた

てて、男爵の後頭部を弾丸が貫通していた。

モンパルナス署殺人課刑事たちは、この殺しを当地元のグレン隊一派のしわざと断定してしまった。事情から推して、そう決定づけるのがきわめて当然なことであった。

危険地帯のモンパルナスへ何を迷ってやって来たものかわからないが、それがバロンの命とりだったのさ、あほうなやつよ、と刑事たちは、陰で笑い、捜査も熱意がなかった。

「これでやっと、ドイツの一匹に復讐することができたわ」

と、カトリーヌはエドモンに言っていた。

「あなたのおかげもじゅうぶんにあるわ。いつまでも感謝しててよ。そうしてごらんない、あたしたちは完全に安全なのよ！」

そのカトリーヌの室からは、あのおびただしい血とあぶらの皮鞭も、二本のレールの唇打ち台も、嘘のように消え果てていた。

やがて娘のサミイの姿も消えた。

次にエドモンの姿も夢か嘘のように消え、また同じくカトリーヌの存在も霧消した。

——すなわち、この短い物語は、全く夢の物語なのである。

夢のように消えるべき物語である。

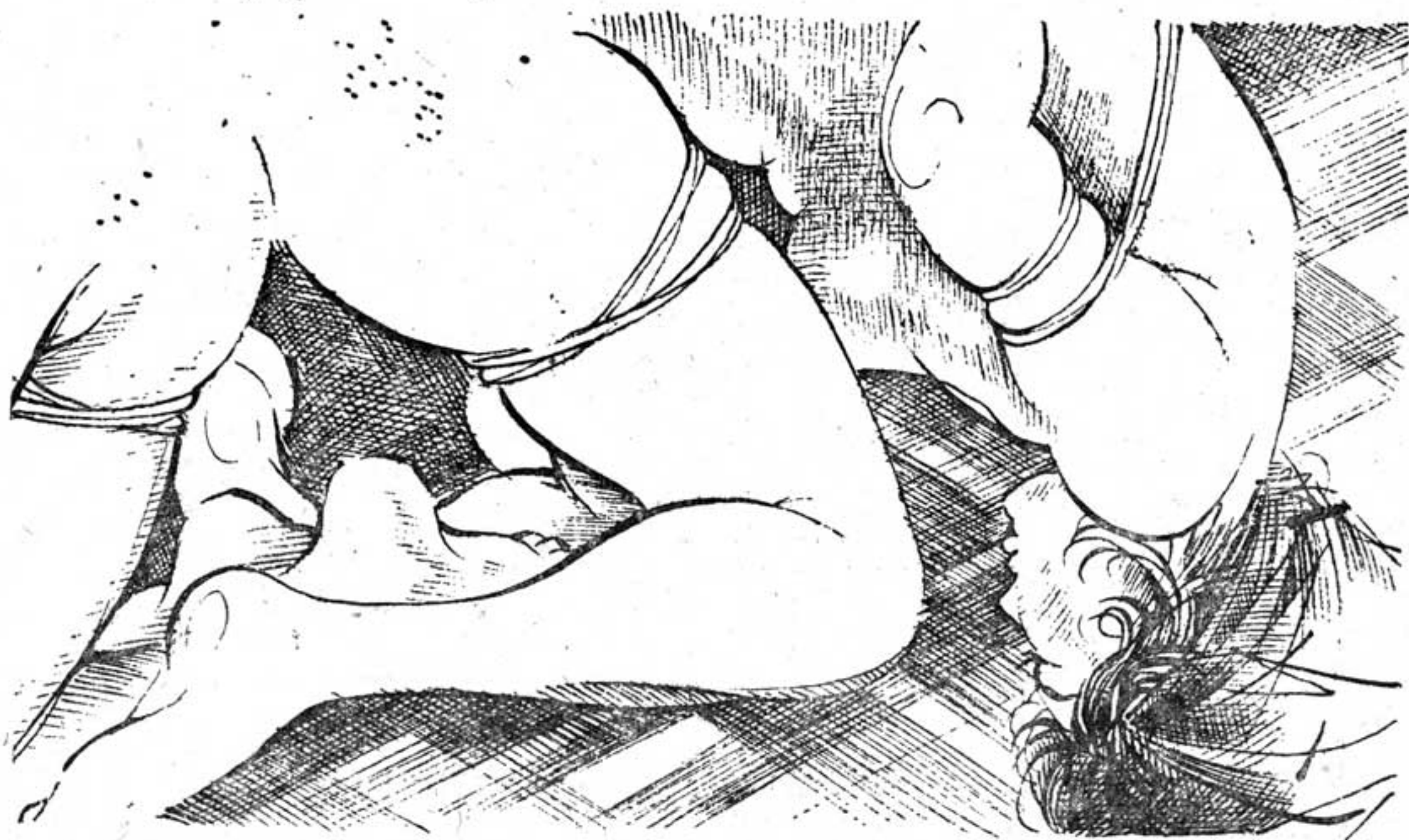
ヒップ 花火

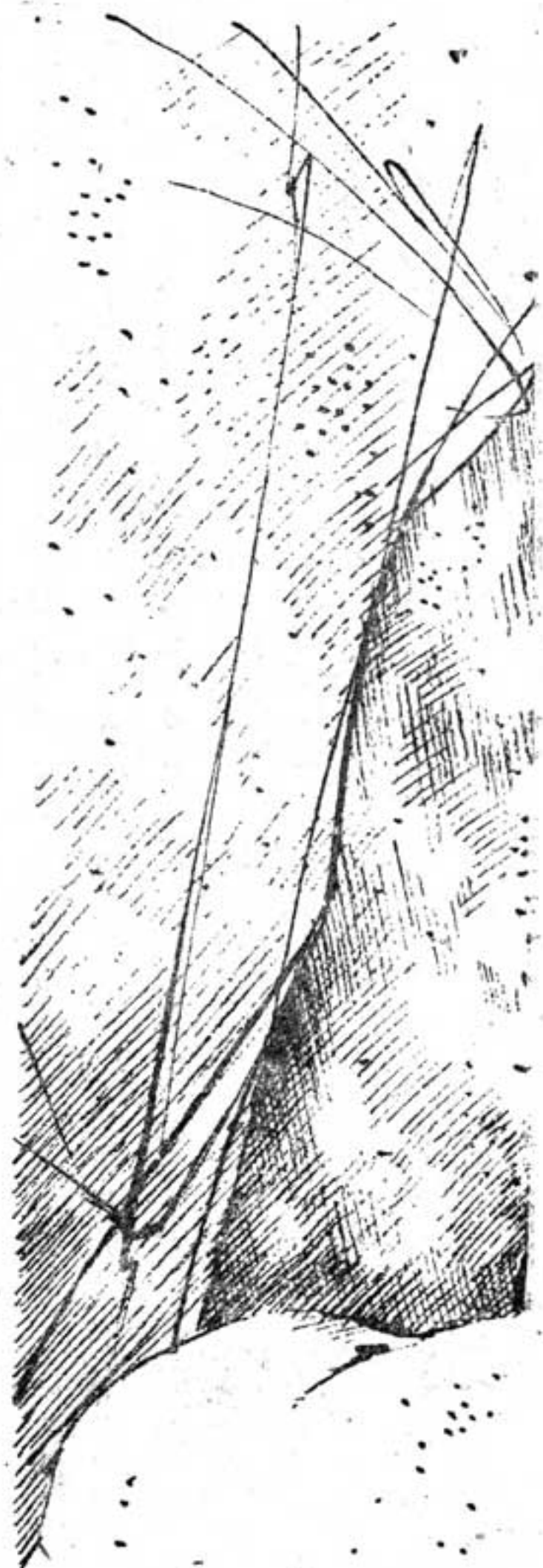
〈後編〉

深夜の夜ふけの庭——その泉水のほとりに
三方から寄せられた三つの血まみれの尻。
その尻のそれぞれの間から、赤、青、黄と
三色の花火が、火炎を夜空に放射した——

北 潤

田上恵子・え





あらずし

サディストである日高靖之助は、恋人の三田加奈子を鞭打することにより陶酔した。白い臀部に情け容赦なく、連日ムチが打ちすえられた。加奈子もそうされることにより被虐に酔った。

一方、日高の友人・藤村順哉夫妻も、日高と加奈子同様、ムチと羞恥責めを好んだ。四人の異常な関係が生じ、日高と藤村は、藤村の妻・桃子と加奈子を交互に打撃して喜ぶ。

そんなある日、加奈子は、美しいお婆といっしょに、東北に一週間の旅に出る。その間、日高は加奈子の邸宅に起き伏しする。二日めの夕方、会社から帰宅した日高の目に、浴室の灯が写った。加奈子が帰った、と思ったかれは、浴室に飛びこむなり皮ベルトを白い尻をめがけて打ちおろした。恐怖の悲鳴がほとばしったが、その声は加奈子のもものではなかった。

絶品の白い肌

加奈子のお婆は三田千景という名まえであつた。三十六、と靖之助にその年を言った。

三十六歳のその三田千景は、じつに艶麗な婦人であつた。あぶらの乗り盛りの輝くような年増美のうちに、優雅な品位がおのずとにじみ出ている、靖之助はかつて、これほどきわだった上品な美人を見たことがなかった。

そういう美しい加奈子のお婆を、かれはの

っけに尻打ちしたのである。これは、あとあといつまでも千景の記憶に残り、靖之助にとっても忘れがたい一事となつた。

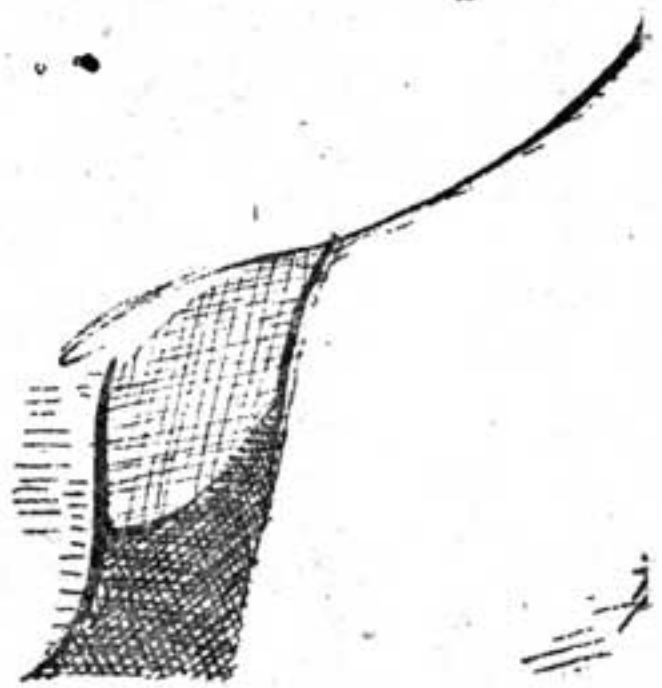
言うまでもなく、浴室で靖之助がいきなりベルトを振りおろしたのは、湯気の中の裸体を、加奈子のそれとばかり思い込んでいたためなのだが、このまちがいは、千景のほうが家に戻って来たことによっている。どうしたつごうからか、秘書役の加奈子のほうがひとりで用務をおびて東北の四、五都市をまわる

こととなり、千景は、加奈子にあとを任して、途中から帰って来てしまったのだ。加奈子はいつ帰って来ることかわからない。

だがしかし、この家には、加奈子に代わって優雅な年増の佳人があらわれたのだ。日高靖之助のサディズムは、それを発揮するに、またとえがたい対象を与えられたのである。

靖之助は、会社の仕事をいっさい放念して、二日二晩の間、狂熱的な意志と努力で、三田千景をおのがサディズムに馴致させるべく試みた。そしてそれは一応成功したと言えるよう。

千景は観念して、命ぜられるままに、みずから尻をまる出しにして、その豊満で形の整った球形を、くまなく靖之助の観察に供した。



泣きながら浣腸も受け、そのあとの本格的な鞭打ちにも、かんだかく悲鳴をほとばしらせながら、耐えた。

尻を打たれるその千景の様子には、桃子にも加奈子にもない、こまやかな哀切なものがみなぎって、上流婦人のいたいたしい被辱の姿であった。

命令どおりに尻打ちを受けたとはいえ、いつ千景は、この家から逃げ出して札幌へ帰ってしまうかも知れない、という恐れが、靖之助には、たぶんあって、会社へ行かねばならなくなると、かれは千景を一日縛りつけておかずにはいられなかった。

逃げないことを泣いて誓う年上の美婦人を、かれは強引にトイレの中へ閉じ込め、両手を後ろ手に一つにさせて縛り上げ、そのロープの先を水道管に結び付けて出勤した。

縛られ、狭いトイレの中に朝から夕方まで閉じ込められて、三田千景は、こんなあさましく哀れな姿を呪いたようだった。

そしてまた、日高というこういうアブノーマルな男性を恋人としているメイの加奈子の身の上行く末のことが、心配されてならなかった。

加奈子がこのまま永久に身を隠したらいい

と、願いたい気持ちである。

日が暮れて靖之助が帰って来た。

「一日トイレの中で過ごした感想は？」

と笑う。冷たい薄ら笑いだ。かれ独とくの氷のような笑い。千景はうなだれて、深く顔を伏せた。すると、

「尻をむけろ！」

と靖之助は言う。ハダカにむかれたままの美しい豊臀を、言われるままかれのほうへ向けながら千景は、あまりのみじめさに、またもそのくちびるから嗚咽をもらしだした。千景はしゃがんだまま尻を向けていたが、中腰に立たされて、尻のすべてを見せねばならなかった。

そのさらけだした尻から、太ももへかけてのなめらかな肌理の白さは、シラカバの肌を思わせるようだ。いや、シラカバの肌よりも白いというロシア女の肌よりも、三田千景の肌はなお白くあろう。こうしてあさましく尻を突き出した姿でいても、三田千景はやはりえもいわれぬ気品がおうのだ。もっとも、と無残に侮辱したい気が湧き上がって、

「自分で尻を打て！」

と靖之助は命じた。

「どんなふうにして……？」

千景は泣きながらきく。自分でムチを使って打つことは困難だからとまどってきいた。

「こうして打つんだ！」

と靖之助は千景の手を取って、その尻肉へ激しく打ち当てた。

「こうして！ こうして！」

とびしっぴしっぴと打ち当てる。

「わかったな、この要領だ。さ、自分で打て」

「ハ、ハイ……」

千景はわれとわが尻をたたきすえだした。

「もっと強く！ もっと強く！」

「ハ、ハイ……」

千景はけんめいに手を打ちあてる。びしっぴしっぴと尻肉が鳴って、もういくぶんか赤みをおびてきた。靖之助はその自虐のさまを熱い目でみつめながら、やがて、

「よし、今度はオレが鞭打ちしてやる」

かれは浣腸器を手にとって、千景に尻たばをひろげさせた。たちまち激しく腸が蠕動して、「うむむ……」千景は排泄衝動に苦悶する。

「日高さん、もう許して……」

こらえきれず、便器にしゃがみ込もうとする尻に、強引に二本めを注入する靖之助だ。



出迎えはヒップで

「大阪の業者の寄り合いはどうだった？　うちの課長は何も言わないが……」

会社で自分を探ねて来た藤村順哉に、靖之助は同僚のてまえ、体裁を作ってそんなことから口をきった。順哉は調子を合わせて応答しながら、やがて声を落として、

「日高、桃子を痛めたそうだな」

「うむ加奈子がいなくておもしろくなくてな、奥さんをかりたよ。しかし藤村、言うまでもなくわかってるだろうが、奥さんの貞操とは別だ。信じるだろうな？」

「信じるよ、むろん。ところで、日高」

加奈子さんが帰ってきたら、また、こないだのように、オレの家に連れてこい、楽しみにしてるぜ、と藤村は言った。

「いや、今後は加奈子の家で、われわれのプレイを楽しもう。桃子さんを連れてこい。今度は女が三人だ。花火をしようと思ってる」

「女が三人だと？　だれがふえたのだ？」

が、靖之助は笑って答えない。

「じゃ、花火というのは何だ？　どんな責めかただ？」

「秋の風流な花火さ」

と靖之助は笑って、このこともまた答えようとしなかった。

靖之助が、その日新宿で藤村と軽く一杯つきあって、今はすっかりわが家のようにしている加奈子の家に戻ると、「三田千景様」と達筆の加奈子からの速達が、玄関の郵便受けにはいつていた。かれがその場で開封してみると、今夜十時着の急行で帰ります、とある。

(十時に上野に着くとすると……)

靖之助は手紙をポケットにしまいながら、(十時半ごろになるだろうな)

加奈子が帰って来ることに、さして歓喜を覚えないのは、千景の存在のためである。十九歳の若い三田加奈子より、三十六の豊艶で気高い三田千景に、靖之助のサディズムは深く傾斜していつていた。

その千景は、きょうもトイレの中に閉じ込められていて、縄をほどかれてトイレから連れ出されると、まるで生き返ったような気持ちになるのである。

そして彼女は、よく訓練された犬のように、廊下で四つんばいになる。靖之助はその背中に馬乗りになたがって、ぴしゃっぴしゃ

っと千景の尻を素手打ちして、それが本格的な尻打ちの前の余興なのだった。

しかし、今夜は、どうしたわけか尻打ちがいつまでも行なわれないので、千景は、茶の間の絨氈の上にネコのようにうずくまって待機せざるをえなかった。靖之助は椅子にすわって、食事のあとのつまようじをくわえ、テレビをながめている。千景には食事をすることを許していない。浣腸を受けて、尻打ちされて、それからあとでないと、千景の食事は許されないのだ。これは加奈子の場合もいっしょであった。だから、食事を許されない以上、今夜も尻打ちは行なわれるのだろう。

千景は、こうしてうずくまって待っているよりも、早く尻打ちを受けて眠りたかった。眠り。すべてを忘れる眠り。今の彼女が求められる唯一の慰安は忘我の眠りしかない。

「日高さん……」

千景の美しい顔がうしろをねじむいて、

「おトイレへ参りましょうか……?」

と、みずから浣腸を誘った。

「……いつまでもこうして待っているのはつらいわ……お尻打ちをされないと、いつまでも気が落ち着かなくて……」

「じゃ、自分でたたいていろ」

「いや、いや……」

千景は甘えるように頭を振ってイヤイヤをし、尻たばをひろげながら、

「浣腸をして、早くスパンクをなさってください……」

「こいつめ」

ちらりと笑いを走らせて、靖之助は美しい豊臀へ近寄り、柔らかな肉をわしづかみにして、ちぎれるほど激しく左右にゆさぶった。

「ひっ……」

千景は上体が前にのめって、カエルのような姿勢で絨氈に両手を突いた。

「ああ痛い……お尻がちぎれそうだわっ」

のどをそらして悲鳴をあげる。このまま責められたのでは粗相をするかも知れませんが、苦しい声で彼女は訴えた。そのことばで、靖之助はわしづかみの手をゆるめた。爪跡が両尻に赤く刻みつけられた。千景は尿意を訴えた。小用を果たすことを靖之助は許可したが浣腸はまだ行なおうとしない。今夜はかれは何か特別な計画を秘めているようだ、と、三田千景は便器にまたがって、はじめてそこに考えがいった。

どういう計画をしているのだろうか? どういう趣向でお尻を責めるのだろうか? そう

思うと千景は、またたまらなくみじめな悲しい気持ちに襲われるのだった。泣くまいと思っても、涙がひとりでに流れてきた。

「そろそろ時間だな」

と、靖之助がトイレにはいって来た。

「さ、浣腸だ、お待ちかねのな」

「ハイ……」

千景は後ろ手でぐっと尻たぽをひろげる。

尻肉が柔らかく豊かで、アヌスが奥深い。千景はかなり力をこめて、尻肉をつかまねばならないのだ。ひとみに涙をとどめてうめきながら苦しい排泄が行なわれる。

トイレから出ると、晩秋の冷たい夜の空気の中で、千景は素っ裸にさせられ、そして玄関まで連れて行かれた。

はだしで玄関のタタキを降りて、立っている、という靖之助の命令だ。鞭を片手に握り式台の上に傲然と突っ立ってかれは命じた。千景がとまどいながらかれのほうに尻を向けようすると、肩口へびしと鞭が当たられ、

「ドアのほうに尻をむけるんだ」

「いったいどうなさるの？」

千景は泣き声で言った。

「加奈子がもうすぐ帰って来る。おまえは、

お尻をむけてメイの帰りを歓迎するんだ」

「ああ——」

「いいか」靖之助は冷然と言う。

「おまえはこういうのだ、お帰りなさい加奈子さん、あたしのお尻をどうかぞんぶんに見てください」とな

「ああ——」

「そら、靴音が聞こえて来たぞ」

かれが言ったとおり、ハイヒールの高い靴音が玄関の石道に響いて来て、ドアが外からあけられた。

「ああ加奈子さん、こんなあさましい姿で、あさましい姿で……」

と、三田千景は狂ったように泣いた。

「さっきのせりふを言え！」

と靖之助。

「——」加奈子は棒立ちで、声がない。

「せりふを忘れたのか！」

鞭が、千景の白い胸を一なぎした。千景はうしろにのけぞりながら、苦痛のうめきとともに、とぎれとぎれに声を吐きだした。

「……お帰りなさい加奈子……さん……あ、あたしの……お尻……を……どうかぞんぶんに……み、見てください——」

「もういいわ、あなた——」と加奈子は言う。

「おばを許してやって——」

「生意気なことを言うな」

靖之助は加奈子のほおをはりとばした。

「おまえのおばがせっかく見てくださいと頼んでいるのだ、よく尻を見てやれ」

「おばさま……」

加奈子は、千景の腰にうしろから両手をかけて、

「……もっとお尻の力をぬいて……またをずっとひらいて……頭を下にさげて……」

加奈子は打たれて片ほおを赤くして、靖之助の顔を仰いだ。

「……よく見ましたわ」

「日高さん、もうかんにんしてください」

と、同時に、せつなく千景も言った。

相互に浣腸して

肉づきの柔らかな自分の尻に比べると、加奈子は若いだけに臀筋の発達した弾力的なお尻をしていると、おばの千景は、加奈子の尻に浣腸を施しながら思った。

靖之助の命令で、千景は、自分の手で加奈子に浣腸するのだが、

「——おばさま、これであいこね……」

と、加奈子は言う。靖之助に尻をさらすこ



とを、この娘
はむしろ歡
喜している
ようなふ
うだし、
わたし
に対し
てもさ
ほど
の差

恥を感じてないらしいと、千景は思うのだ。
これであいこねと、むしろ千景をいたわる。
「さっきはずいぶん恥ずかしかったでしょう
ね、おばさま」と加奈子は言ううちに、排泄
衝動を生じて身もだえしだした。浣腸責めは
このときに次々とあとを続けてこそ効果があ
るが、千景の手つきはまだろこしくって、靖
之助は千景をどなりつけた。千景はいっそう
ろうばいし、片手で加奈子の尻の深奥に栓を
するように押えながら、不器用な手つきで二
本めを挿入した。

ともかく浣腸の役目を果たし、千景はほっ
として、額ににじんだ汗を手の甲でぬぐい、
便器から腰を上げた加奈子の尻の形を、いま
たあらためて見直すようだった。その千景の
視線を、靖之助は目ざとく見て、
「自分の尻と比べてどうだい？」

千景は思わず顔を赤く染め、あわてて加奈
子の尻から目をそらした。加奈子もまたこ
のとき急に顔をあからめた。

ふたりは、茶の間に連れて行かれた。どち
らも全裸の女同士は、赤い絨氈の上で、
なんととはなし甘やかな羞恥感を、漂わし
た。浣腸を受けるとき、加奈子の平気
そうだった態度は、虚勢であったこと



を、千景は悟った。

靖之助はだれかに電話をしたようだった。

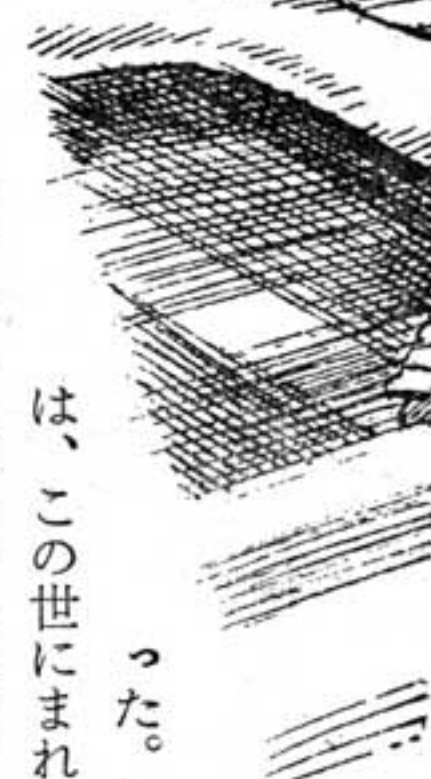
藤村順哉にかけたのかも知れないと、加奈子は思ったが、千景のほうは、夜おそくにだれに電話したのか全然見当もつかなかった。しかし、靖之助がまだ何か変わった趣向をもくろんでいるらしい予感が強くした。はたして靖之助は、

「しばらく自由にしてていい」

と言うのである。

「あなた、まだわたしを愛してる？」

と三田加奈子は、この機会に靖之助に問うた。この人はもう美しいお婆のほうにすっかり心移しているのではないか、という気持ちだが、玄関で千景の鞭傷の尻を見た瞬間から、加奈子に生じている。が、しかしたとえそうであったとしても、お婆に嫉妬をいだく



気はなか

った。お婆の千景

は、この世にまれなほど美し

い。こんな美しい人に靖之助が心移すのは当然だと思うし、それを妬くのはしよせんかなわぬものにさからってゆくような、愚かなことだと思ふのだ。

「愛してるの？」

加奈子は微笑して重ねて言った。

「うるさい」

と靖之助は舌打ちした。

「もういいの、わかってるのよ」

そう言って加奈子は、お婆の横顔をなんとなく見つめた。お婆が、靖之助に対してどんな感情を持っているか、読みとろうとするように。

お婆は、しかし寂しい表情で、白いたわわな自分の乳ぶさを見つめている。その寂しい表情が妙に色っぽく美しくって、加奈子は突然、千景の腰に手をかけ、

「もう一度よくお尻を見せて」

千景は目をつぶり、少し腰をねじって尻を浮かした。

「だめ、立ってよ……」

千景は立ち上がって、中腰の姿勢で尻を突きだした。両手をひざがしらへすべらした。

「だめだめ……」と加奈子は甘え声で言う。

「加奈子さん……」

同性愛にも似た不思議に甘美な感情が、千景の胸にも伝染して、彼女はついにみずから両手で尻たぶを割って、くまなく展示した。

「そのままよく見せて——」

加奈子は夢中で見入った。上品な美しいお婆が、いま恥を忘れた臀部展示をする……加奈子は熱い血が頭に上るようだった。

ふたりのそんな様子を、日高靖之助は一種孤独的に冷ややかにながめていた。

このお婆とメイは、やがてそのうちに日を追って、ふたりだけの城を築いてゆくことになるかも知れない、とかれは思った。

どんな色どりで城を塗り上げてゆくことか、それはわからないが、ともかくその城に自分はいはいることはできないだろう、城に背を向けて、自分はさすらいの旅へ出なければならなくなるだろう、とかれは思うのだ。

——と、かれは椅子の上で耳をそばだて、

「おまえたち」椅子から立ち上がった。

「お客さんが見えたようだ。玄関へ行って尻

を並べてお出迎えして来い」

コートの下は裸身

藤村順哉は、玄関にはいると妻の桃子のコートを取った。すると桃子の裸身があらわれた。コート一枚羽織らせて連れて来たのだ。それから藤村は、加奈子の尻を軽くなぶって、次に千景の顔をのぞいた。かれもまた、千景の美貌にひとしおうたれ、名まえと身分とを聞く声に、いい知れぬ感動がこもっているようであった。

名まえと身分と年齢とを千景は告げ、ひとりだけ玄関に残されて、尻を展示しなければならなかった。見知らぬ初対面の男の目にさらすことなので、尻たぽをわけ割る手が震えるほどに、彼女は新しく羞恥した。

「浣腸はまだでしょう？」と藤村はきく。

「いいえ、もうさっき……」

桃子はまだ済んでない。靖之助が、桃子をトイレへ連れ込んでいた。浣腸器を持って加奈子があとにしたがった。

「ああッ……」

尻肉をつかまれて乱暴にゆさぶられると、こちらでは千景がうめく。藤村は靴で二度三度打撃を加えた。その部分がみるみる赤くな

った。靴で尻の皮が少し切れて、早くも血がにじみだしていた。

尻打ち三重奏

やがて茶の間で三人の女が尻を並べて勢ぞろいした。まん中に立たされた三田千景の尻だけが、もうすでに左側を血に染めている。

「竹鞭がいいか、皮鞭がいいか？」

と日高靖之助は微笑を浮かべて言う。

「皮鞭の場合は四つんばいで、竹鞭だったら股開きの中腰の姿勢でアヌスも打つが……」

と、藤村順哉は竹鞭の先で三つの尻を一度りなぶりながら笑った。

「……わたしは皮鞭でお願いします」

と、千景は四つんばいになった。

「アヌスを打たれたって、竹鞭のほうが痛くないのに……」

桃子は小声で言ったが、千景に続いて加奈子も四つんばいになると、自分もそれに従って、同じく犬の姿勢をとった。

猛烈な皮鞭の洗礼が開始された。

二条の鞭がうなりをひいて、順ぐりに三つの裸臀を襲って激しく炸裂する。そのすさまじい響きと、三人の口からほとぼしる、身を切るような悲鳴が宙に交錯し、地獄絵巻きの

一場面を見るような光景である。

「ああッ——」

「ひっ——」

「むううッ——」

花火は、この皮鞭によるすさまじいスパンクが小一時間近く続けられて、女たちがそれぞれ尻を血まみれにして、死んだごとく倒れ伏したのちに、さらに加えられた一種華麗ともいふべき尻責めであった。

打ち伏した彼女たちは、またすぐ鞭で威嚇されて、夜の庭へ引き出された。

夜露の満ちた冷気流れる深秋の夜更けの庭の、泉水のほとりに、三人の女は三方から尻を寄せ合ってはわせられ、それぞれ尻の間に一本ずつ花火をはさまれたのだ。

三本の花火に同時に火がつけられた。

三塊の血まみれの尻を赤、青、黄色に多彩に照らして花火は燃え、熱い火の粉を尻一面に降り散らし、バン、バン、バンと火炎の

矢を美しく夜空へ放射した。その華麗な花火の宴は、三人の尻を焼きただらすに、じゅうぶんな火の粉を降らしていた。

世にこれほど贅沢な花火遊びはあるまいと、靖之助も藤村もしびれるようなサディズムの陶酔に浸っていた。

(完)

<告白>

浣腸に陶酔するあたしと仲間たち

縛られたうえに、浣腸をされ、さらにお灸を若い男からすえられて、あたしも、玲子も、マダムも、恍惚の境にさまようのです。

夏 川 絹 子



メンバーの横顔

いまさら言うまでもありませんが、あたしは浣腸マニア。そして、同じ趣味のグループが、あたしの周囲に何人かいます。

まず最初に、どんなメンバーか、それを紹介してから、あたしたちがどんなふうに参加するか報告しようと思います。

まず玲子——彼女は、あたしの会社の同僚で、あたしより三つ年下、この七月で満二十一歳になりました。浣腸が大好き（あたしが教えこんだのですが）なくせに、いつも恥ずかしがって、最初に悲鳴をあげてしまいます。グループのペット。

次がマダム——バーの経営者で、貞夫さんをアパートの隣の部屋に住まわせ、パトロンのこない時に、責めさせています。その目的でウナギを飼い、針で責められることも好きな、グラマー女性。パトロンの「女のいのち」に葉巻きを差し込まれて飛びあがったこともあります。

それから貞夫さん——バーテンさん。サイホンの発明者で、若いに似あわず、いろいろな責めを知っている。あたしにお灸の味を教えた張本人で、アヌス・コイツスもするが、

男色には全然興味ないとのこと。会長格です。そして正行さん——こんど知り合った、貞夫さんの友人で、旅館のボンボン。恋人に浣腸したくても、彼女の性向がわからないのでできず、あたしたちでがまんしています。貞夫さんと同じく、恋人にアヌス・コイツスをしてみたいというのが最終の希望だそうです。が、お灸もムチも大好きと言っています。

京子さん——正行さんの恋人。あたしはまだお会いしたことはありませんが、正行さんは、一度紹介するから、浣腸マニアになるよう、だんだん仕込んでくれと、あたしに言っています。あたしの勘では、彼女も、けっこう浣腸に興味をもって思えます。

最後に絹子——言うまでもなく、あたしです。高校時代に、お医者様の家で浣腸される患者さんを見て以来のマニアです。この夏な

くなったお友だちの信二さんに仕込まれて、今では、流腸についてはベチランのつもりでいます。お灸もだんだん好きになり、とくに温泉流腸とそれに付属する(?)アヌス・コイツスの味も忘れられないようになりました。

以上が、あたしたちのグループですが、てんでんばらばらだったあたしたちが、どうしてグループをつくったか、をお話したいと思います。

あたしと玲子、そして貞夫さんとマダムと知り合ったいきさつは、前に書いたことがありますが、それではぶいて、それからあとのことを書いてみます。

正行さんの申し出

あたしと玲子は、例によって例のごとく貞夫さんのバーに遊びに行きます。

すると、貞夫さんがあたしたちを呼んで、「きょうは、いい人を紹介する



よ。もちろん、男の人だがね。身元はしっかりしているし、絶対に秘密を守る人だからさ、ほんとうに安心してつきあえるよ。箱根で旅館をしている人だよ。どう、つきあってみない？」

あたしたちはしばらく考えましたが、かれの紹介でもあるし、秘密が守られるならと、OKしました。

さっそく、かれに呼ばれて、すみのほうのテーブルから立ちあがって来た人は、五尺七、八寸あるでしょうか、見るからに、ガッチリとした肩幅の、スポーツマン・タイプの人でした。

「はじめまして、^{まさゆき}ぼく正行といいます、よろしく。ぼくのことば貞夫君から聞きましたか。

ぼくもあなたのようなかたたちをさがしていました。お会いできてうれしいな。これからよろしくおつきあいください」

快活に話しかけてきます。あたしたちも、いっぺんに好感を持ってしまいました。貞夫さんが、

「きみたち、せっかく集まったのだから、どうだろう、みんなで例のグループを作ったら」と提案しました。一も二もなくあたしたちはグループを結成することにしました。

さっそくいろいろな相談を始め、メンバーには、玲子、マダム、貞夫さん、正行さん、そしてあたしと五人が正会員ということにし、正行さんに恋人がいるのですが、その人はあたしたち女の会員が徐々に流腸の味を教え、最後に六人のグループにすることに決定しました。

本当は、正行さんは、恋人に流腸をしてみたいのですが、最初からでは変なので、あたしたち女の手をかりて、仕込んでもらいたいのが本音のようでした。

会則としては、昼間、プレイ関係以外の時は、道で会っても全然他人でいることが決定されました。

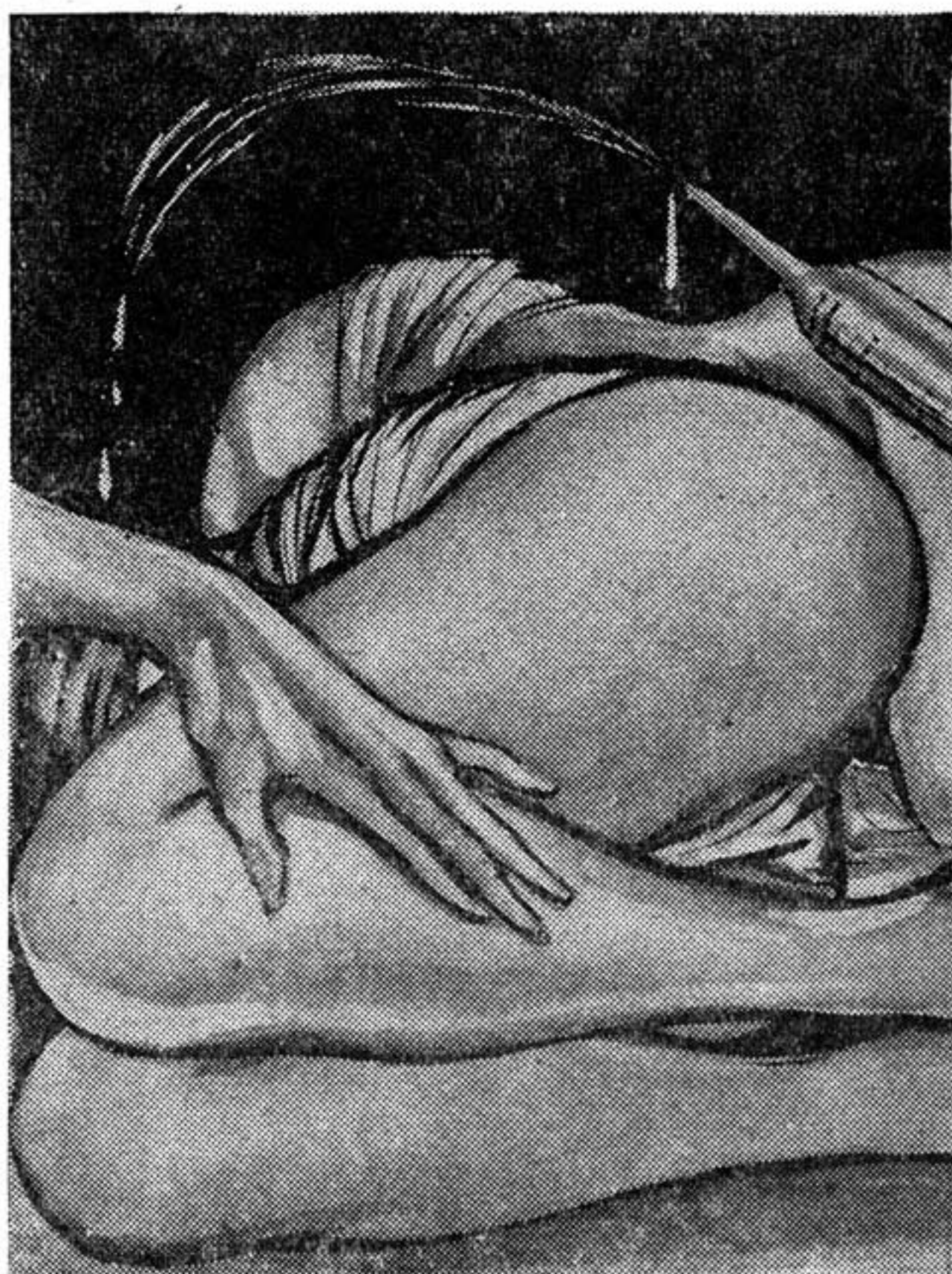
「ところで八月十六日は、^{ごうら}強羅温泉で大文

字焼きがあるけど、ぼくの家に、泊まりがけで遊びにこないか。そして、グループ結成第一回のレクリエーションをやたらどうだろう。ねえ、マダム、いいでしょう、一日ぐらい店を休んでも。われわれの記念すべき第一回会合だものね」

ちょうど店に顔を出したマダムに、正行さんが話しかけます。

「アラ、いつの間にあたしも仲間にはいつているのね。でも、おもしろそうね。いいわ、それじゃあ、その日は、大文字を見物しがてら行こうかしら。絹子さんたちは、つごうはいいの」

「ええ、もちろん、よろこんで参加させていただきますわ」



ということになり、あたしたちは第一回の会合を八月十六日と決めました。

三人いつしよで

さて、いよいよ当日です。あたしたちは、正行さんの旅館で、風呂にはいり、夕食をし、まず大文字見物です。

見物を終わり、いよいよプレイの開始になります。

プレイの前に、皆で飲んだビールが、あたしたちをいっそう大胆にします。

正行さんの部屋に決められている離れで行なうことになりました。部屋といっても、そこは旅館のこと、バス・トイレ付きのりっぱなものです。

まず、全裸になったあたしたちは、三人腹ばいになって横にならびます。そして、グリセリン50%溶液をエネマで、男たちふたりから注入を受けます。

そしてソーセージを、せんのかわりにかわれます。ソーセージはそのままだと抜けてしまいますので、途中をねじって、中の肉を区切り、あとは全部挿入されています。

一分、二分、だんだん苦しくなってきました。しかし、男の人たちはふたりして、あたしたち三人の上からだを長々と寝せて、重しのかわりになって動かしません。そのうえ手は、ソーセージをしっかりとにぎり、おさえつけています。

ふたりの重みでからだ全体は苦しいのに、直腸は流腸液でグルグル鳴って苦しくなってきました。

「ダメ、ダメ、助けて、お願い」

玲子がさけびます。

貴方のお肌が求めている 愛玩こけし

話題の焦点

PAT

No. 196415

No. 196838

好適!!



四大特徴

- 長さ大一七・五糎中一二・五糎小八・五糎
- 外径四・五糎内径三・五糎(大中小共)
- 身体各所のマッサージ・全身美容に...
- 寝室・風呂場のアクセサリに.....
- 宴会演芸会の小道具マスコットに.....

◎有力各週刊誌で大問題になった!!
◎製法特許の珍妙なこけし? 特別分売中!!
◎ありとあらゆる御使用法!

とても良い感触です。
美容効果もある最適品!

- ☆水又は湯に浸すと軟かくとても良い感触になります。(気分良好にして.....快使用感)
- ☆使用後水を切ると自然に硬くなります。
- ☆汚れは石けんで洗うと、きれいになります。
- ☆絵はぬれても、他につきません。
- 美麗ケース入り(説明書付)
- 特価 大六百円 中五百円 小四百円(送料共) 申込は下記宛に現金書留又は為替でお申し込み下さい。先着順にお送りします。

あたしも、苦しくなってきました。しかし

この苦しみを耐えてこそ、次の排泄の時のすがすがしさが味わえるのです。

必死にこらえます。顔はおそらく、汗ですごいことでしょう。

がまんできなくなった玲子は、立ち上がるとうとします。すると、貞夫さんは玲子のからだの上に、逆にのしかかり両手でソーセージをしっかりとおさえつけています。

玲子は、涙を流して苦しがりまう。何分たったでしょうか、まず、玲子が許さ

れ、そのままの姿で排泄を強要されます。

続いてあたし、最後にマダムです。

あまりの苦しさに、排泄してホッとしたあたしたちに、

「50%でなくて、おきのどくさま。本当はストリートだったのさ」と、正行さんの声です。あたしたちは、本当にグッタリとしてしまいました。

次に、ナス、ピンポン、卵などを行なう予定でしたが、なにかと急に決定したことなので、準備不足で、材料がそろわず、見送りに

なったことは、残念でした。

真打ちは温泉浣腸

さて、いよいよ温泉浣腸です。

あたたくしは、自分から希望して、正行さんに行なってもらいたいと申し出ましたが、正行さんは、皆がいるてまえ、恥ずかしいのかなか実行しません。

そのうちに、貞夫さんが、玲子とマダムに施術し出しますと、それに勇気づけられたのか正行さんも、サポーターをはずし、あたし

東京都千代田区神田東今川町5 (瑞光ビル)

美容こけし・総発売元

睦平商事株式会社

に挿入して来ます。

はじめての人なので、あたしも少しドキドキします。なれないせいか、すぐにやめてしまい、てれたような顔をしています。

あたしは、あらためて貞夫さんに行なってもらうようにと思い、かれに話しますと、「いまマダムと玲ちゃんに注入したばかりだから、少し待ってくれよ。この流腸液は限度があるからな」

と答えますので、少し待つ間に、すっかりあたしたちのからだを洗ってもらい、縄を解いてもらって（このときは、あたしたち三人とも縛られていたのです）部屋に帰って小休止です。

「そうだ、お灸をしよう、もぐさなら、おやじのやつがあるはずだ。とって来るから、貞夫君、女の人たちをしばっておいてよ」

と、正行さんは部屋を出て行きました。「よっしゃ、では、お灸をやらせていただきますかな。みんな、そこにねころんでよ」

と貞夫さんは、あたしたちを、頭を中心にして大の字に寝かせ、あたしたちのからだを円形を作り、両手両足を縄でしばります。

正行さんが帰って来て、

「こりゃ、すばらしい。円形の大文字だね。」

これでお灸をすれば、円形大文字焼きを観賞できる」と、大はしゃぎです。

「じゃ、カミソリできれいに除毛しよう」

と、ふたりで、あたしたちのからだをきれいにします。

「さて、今夜は、ミソをつけずに、もぐさのストレートでいきましょう」

と、貞夫さんの案です。

「イヤよ、そんなの。あとが残るでしょ」

と玲子が、はや泣き声です。

「だいじょうぶ、また毛が出て来れば、かくされてわかりっこないさ。さて、始めましょ」

「イヤです。お願いだから、やめて」

玲子とあたしは叫びましたが、いきなりふたりは、あたしたちの脱いだパンティーを口の中につめこみました。からだをよじってさけようとしては、しばらくはいるので、なんともなりません。両わきに一口ずつもぐさをのせられ、点火です。

「アツイ」

さけんだけれども、さるぐつわで、声になりません。マダムは、じつと身動きしませんが、熱さを楽しんでいるようです。

あたしと玲子は一回で許されましたが、マダムは、まだ正行さんに次々と点火されてい

ます。見るとマダムは、ウットリして、腰のまわりの畳がグッショリとぬれていました。

あたしと貞夫さんは、さっきの約束の温泉流腸のため、風呂場に行きます。

「ひどい人ね、おミソもつけないでするなんて」

「ゴメンゴメン、だけど、ほんのちょっとだけだったろう。温泉流腸がすんだら、手当をしてあげるよ」

と、貞夫さんは、さっそく流腸にとりかかります。

「まって、その前に、この間やった温泉流腸の前のをやってよ」

「だけど、玲ちゃんが来るとまずいよ」

「平気よ」

あたしがさいそくしますと、「しようがないな、じゃ始めるか」

と、貞夫さんは、いきなり始めてきます。

局部がカッカとホテッて来ました。そして、しばらくして、温泉があたしのからだに流れ込んで来ました。もちろん、温泉の前には熱いものが……

あたしは、この第一回のグループ結成会を思い出し、今夜はひとりで、卵とナスで遊んでおります。

性転換手術はこうして行なう

医学博士 石川 明



性転換手術は、実際どのように行ない、どのような結果になるか、また、手術に要する費用、日数などはどのくらいか、などということについて、関心をお持ちのかたも少なくないと思われますので、外科の臨床にたずさわっている者として、実例をお知らせしよう。

転性手術の歴史

転性と、ふつういう場合は、女性を男性化する手術は含まない。いわゆる去勢のことである。

現在の転性手術が、かつての去勢術と最も異なる点は、手術後の処置であって、生殖器をとり除くという点においては、全然差はないわけである。

人類が去勢術を知ったのは、家畜飼育を行なうようになってであろうから、それほど古いことではない。動物に対して行なっていた去勢術を、いつ、人間自身に適用するようになったかは、つまびらかではないが、大規模に行なうようになったのは、古代中国であろう。中国の歴史を見るうえで、宦官の果たした役割は、どうしても見落すことのできないものである。

去勢の目的は、治療（これは現在でも行なわれている）、刑罰、宗教的理由、その

ほか術後の生理的変化を目的としたものなどであるが、今までに去勢の例の残っているものは、つぎのようなものがある。

まず宦官——量、質とも史上最大であって、つい最近まで生存者がいた。あるいは、まだいるかもしれない。

いうまでもなく、後宮管理者というのがその発生。犯罪者などで、罰として処置された者が多いが、のちには自然的に希望した者も少なくない。

アラビアのハーレムの僕者——アラビア・ナイトには、寝ている間に手術されてしまった男の話がでてくる。発生の動機は、宦官と同じである。

聖歌合唱隊の少年——教会の合唱団でボ

—イ・ソプラノが変声するのを妨げるために行なったもの。

スコペッツ（ロシアのキリスト教の宗派の一つ）——欲望を絶って神につかえるという意味で、入派する者は全部、適用を受けた。

多数の男子が制度的に受けたのではなく、個々の少数例で有名なものは、アベラールとエロイーズなどがある。ふたりが恋愛関係にあることをおこったエロイーズの父親が、刺客をして、アベラールのそれを切り取らした事件。

この程度の例は、おそらく世界各国どこにでも散見することで、日本でも、阿部定事件など、もし被害者が生存していれば、当然このたぐいである。

さて、その術式だか、消毒法、止血法、麻酔法が進歩した現在では、ほとんど危険のない簡単な去勢も、かつては、相当の大手術と目され、命を落とした者も少なくないようである。官宦は、手術がうまく行ったときは、お祝いをしたものらしい。

一番乱暴なのは、そして一番多かった例は、陰茎、陰囊をいっしょにヒモでしばっ

て、ひっぱっておいて、刃物で切るという方法があった。尿道のあと始末がむずかしかったよう、術後、排尿さえ順調にできれば成功とされた。

つぎが、陰囊のつけ根を糸で緊縛して血行をとめ、いわば腐って落ちるのを待つという方法。有名な司馬遷などは、この方法でやられた。これは、今でも、家畜の去勢には使用されることがある。陰茎はそのままだが、去勢の効果には差がない。

そのほか、刑罰として行なわれる場合の方法には、焼き切る、強い酸などで腐蝕させる、ひどい例では犬にくわせた、などという例もあるくらいである。

現在の手術方法

昔の去勢術は、要するに、男性ホルモンの供給源を絶てばよかったのが、今日の転性手術は、それだけでなく、はなはだ美容整形的なものを要求される。

もし単に去勢だけでよいのであれば、手術は男性不妊手術の一種として、きわめて簡単で外来で来て手術後一、二時間静かにしていれば、いっさい問題ない。少

しがまん強い人なら、麻酔なしで自分でもできる。

方法は、なるべく陰囊上部に二センチほどの切開を入れる。その線が縦か横かうるさくいう人もいるが、どちらでも大差はない。切り口から片方ずつ睪丸を脱転させて（これは割合簡単にコロリと出る）から、精管その他を糸で縛って切り離す。消毒は、赤チン程度でじゅうぶんである。切開したところもまた、しいて縫わなくてもよい。ただ、からになった陰囊内に血がたまるとまずいので（出血もほとんどないが）、術後T字帯などで陰囊を押えておくのがいい。

この手術は、簡単で、しかも効果はほかの転性手術と全然変わらないから、もっと普及してもよさそうなものだが、実際に希望者が非常に少ないのは、やはり、きわめて小さくはなるが、陰茎と陰囊が残ることであろう。

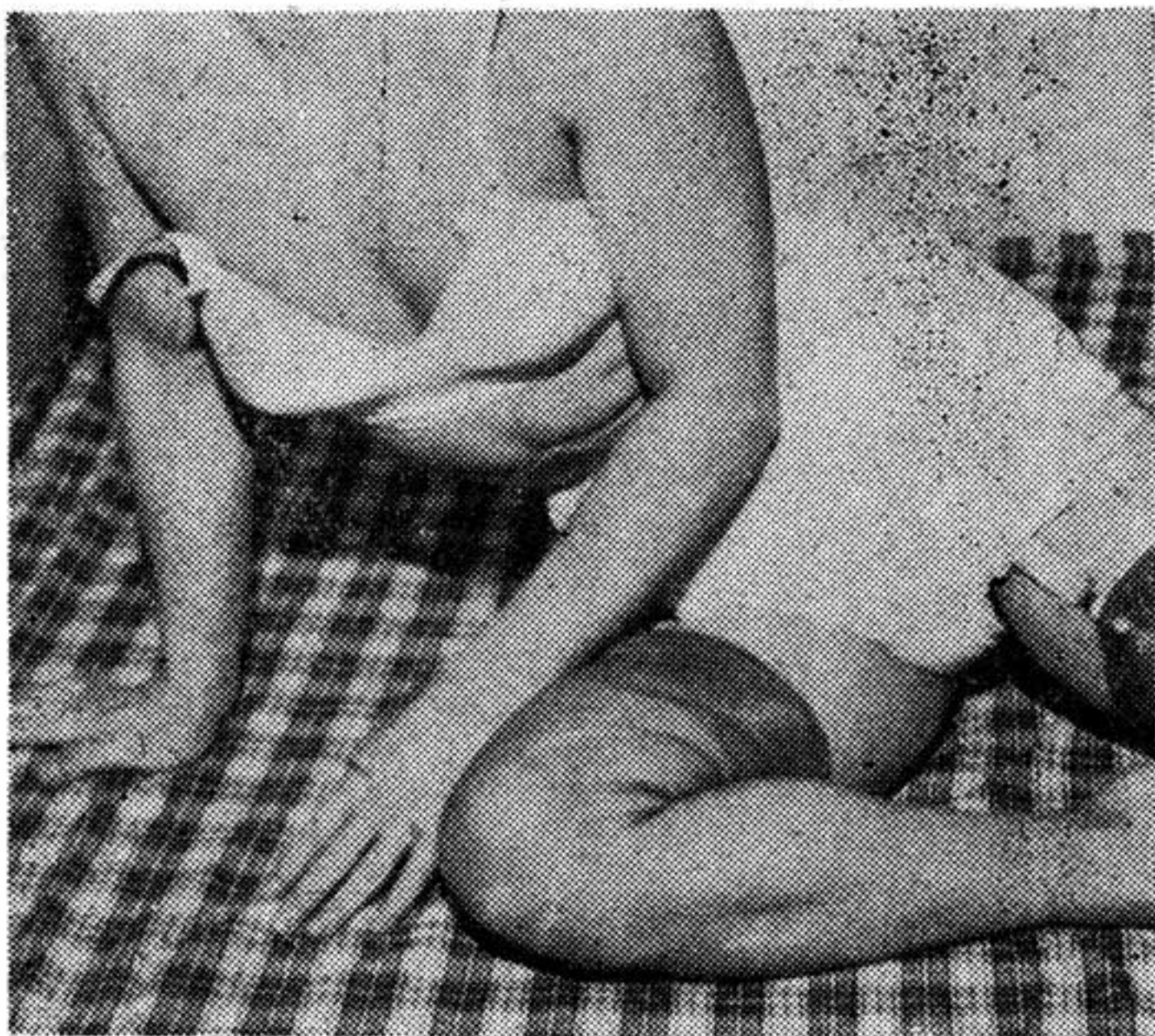
もし、費用の点から手術に踏み切れない人がいたら、まず、この簡便法だけを受け、その後、適当な時期に、陰茎切断をおやりになるといい。早く去勢手術を受ければ、それだけ早く効果が現われるわけであ

るから。

ご承知のように、この手術さえ受けていけば、あとは女性ホルモン（卵胞ホルモンだけでよい）を適宜使用することで、徐々に男性性徴のいくつかを消すことができる。

では、次に、外見上も完全に女性性器化する方法をのべよう。これが、いわゆる性転換手術であるが、細かくいうとまだ二段階ある。つまり腔を造るか造らないかである。かつての未熟な外科技術では人工造腔など思いもよらないことだったが、今は時間さえかければ、なんでもない。

この手術のことを、医者は、陰茎切断と呼ぶ。まず患者（といっても性転換希望者は肉体的にはどこも欠陥はない。したがって、手術の予後の経過も良好だが）の陰毛にカミソリがあてられ、浣腸が施される。一般に、この手術は、虫垂炎（盲腸炎）の手術とその程度が似ているから、いくつか



転性手術を受けたが、まだシンボルの切除はしていない

の処置は共通している。

つぎに、腰椎麻酔を打つ。これで、患者の下半身は全然痛みを感じない。少し特異なのは患者の寝かせかたで、両足を開いたかっこうで、少し頭のほうを低くして、あおむけに、つまり産婦人科の診察台を少し頭のほうへ傾けたものと思えばよい。

メスは、陰茎のつけ根の上の部分から入られて、陰囊のつけ根にそって左右両側から肛門の前二センチのところまでの皮膚を切る。昔の去勢であれば、そのとき陰茎も睪丸もみんな切ったわけだが、いまは、切るのは皮膚だけである。そうすると、陰茎の亀頭の部分だけがひつついていくだけで、ペロッと皮膚がとれ、陰茎の筋肉や睪丸が露出するわけである。もちろん、止血その他は、皮切の進行につれて行なっていく。まず処置するのは、睪丸である。鼠径部（太もものつけ根）で、精管とその他を分離して、別々にそれぞれ縛ってから切断する。これで両方の睪丸はからだから離れたわけである。

つぎに、横下腹にある陰茎韌体（勃起させる筋）を切ってから、陰茎を前から後ろへ引きはがすようなつもりで、陰茎海绵体（陰茎の上半分）と恥骨とがくっついてい

るのを削りとりながら切り離す。これで、陰茎は尿道海绵体（下半分）が少しからだについているだけで、ダラリとなる。あとは、新しい尿道口をどこにつくるか長さをかげんして横に切断すればいい。

傷口の縫合は、女性の陰唇部に相当する。余裕も残さなければならぬし尿道の位置もそれに見合うものでなくてはいいけない。針も糸も細目のもので、縫合間隔も比較的せまく縫う。このあと、尿道には、カテーテルという細い管をいれておいて、排尿が不便でないようにする。人工造腔を行なわない場合は、一週間ほどで抜糸できる。

女性に造腔手術をする場合（まれにそういう人もいる）だと、腔壁用に大腿部の皮膚などを切りとらなくてはならないが、転性手術の場合は、切りとった陰嚢が、ちょうどよい。陰嚢の、内側だったほうを外に裏返してプロテーゼ（棒）にかぶせる。太すぎる場合は、縫い縮めてから、前につくっておいた隙間に挿入するわけである。プロテーゼは、むろんそのままにして、それから縫合である。

手術そのものは、麻酔下で行なわれるから、ほとんど苦痛はないが、プロテーゼのぬきかえ（毎日行なう）を行なうときは、傷口にふれるので、痛みを訴える患者が多い。ややもすると、人工腔は、腹圧によっ

てつぶされがちだから、気長に治療することが必要である。

以上が、手術そのものの概略であるが、経過が良好であれば、抜糸の跡などは、股間部であるし、陰毛がのびるにつれて、ほとんどわからなくなる。

全治までに要する期間は、造腔なしの場合で二週間、造腔をとまなう場合で一カ月というところであろう。

費用は、術者の技術によってかなり幅があるが、入院費こみで、腔なしが五万円前後、腔つきが十万円前後と思えばよい。造腔は別として、陰茎切断は、治療目的ということで、健康保険利用という手もある。

デラックスな手術であれば、以上のほか、さらに陰毛の生えかたを幅せまくすることとか、恥骨上に盛り上がりをつけるとか（転性者はスラッとした感じになる）してもらうのがよからう。

将来の見通し

狭い意味の転性手術（性器の外見を変え）は以上であるが、本当に女性らしくな

るためには、まだ問題が、いくつかある。たとえば、身長は短くするわけにはいかない、肩幅も骨盤の幅もどうしようもない。声もダメである。これらの問題は、将来は解決されるに違いないが、目下のところ、これを避けるには、二次性徴が現われる前に手術するよりない。

だから、わたくしのところでは、次のようなかたには、なるべく思いとどまるようおすすめてしている。三十歳以上の人。身長一六〇センチ以上の人。下あごが非常に角張っている人、眉の上が飛び出している人。のどぼとけの高い人。そのほか一見して男性的特徴が目立つ人。一般に、こういう人たちに手術すると、性ホルモンのバランスが、非常に大きくくずれるためか、心臓肥大とか、腎臓障害とか、余病を併発しやすく、短命に終わる例も少なくない。

将来、生体蛋白の構造が究明されつくしたあかつきには、他人の臓器との交換も可能となるだろうから、性転換者が妊娠して子供を生めるようになる可能性もあるかもしれない。

腹を切り裂かれて、胎児もろとも絶命した妊婦のおびただしい血にぬれ、かわくことかない大石——この石には殺された女たちの亡霊の、のろいの声がこもっている。

地獄城のマナイタ石

赤木恵介

古正英生・え

主君の命令

——むッ……

蒲生忠知は、ひくいうなり声とともに、たずなをひきしめ、馬の足をとめた。

忠知の目が、道ばたに平伏する、ひとりの女を、するどくながめおろした。

商家の若女房らしい、こざっぱ



りしたみなりの、美しい女であった。

城主一行の通行を知り、町なかの軒したや道ばたにひざを折り、あたまをさげている男は、ほかにも多くいた。

が、馬上の忠知の目は、その女房だけを、凝視していた。

しかし、城主のころは、若女房の色香をたのしんでいたのではない。

忠知の表情に、陰悪な、のろいのような、かげりがよぎった。

「——源五、ちこう寄れ」

あとにつづく家臣のひとり、忠知は呼んだ。

「は……」

黒田源五右衛門は、馬頭を主君のななめうしろまで寄せた。

「あの女をひとつとらえ、城中へひきずってまいれ。よいか」

忠知はめいじた。

「は？」

源五は、いぶかりの目で主君の顔をいろをよみ、それから、平伏している女をみおろす。

「なんでもよい、つれてまいれ！」
かぶせるようにいうと、忠知は

イライラと馬腹をけった。

「かしこまりました」

命令の真意はわからなくとも、主君のことばには、服従せねばならぬのが、臣である。

源五はふりかえり、背後の部下たちに、城主の命令をつたえた。

ときは、寛永九年の秋。

伊予松山城の城下町における、できごとであった。

憎い腹

——この女、殿にたいして、なにか、ぶれいをはたらいたのであろう。

と、黒田源五右衛門は思った。

ひとつとらえてまいれ、という命令なのだから、そう思うのは当然である。

女は、絹織りもの商、阿波屋喜助の女房で、名を、のぶといった。

喜助とは、昨年の春めおとになったばかりで、十九歳のういういしい若妻である。

「あれ、なにをなされます！」

いきなり縄をかけられたのぶは、仰天してさげんだ。

のぶにとっては、まったく身におぼえのない、縄目であった。

「こい。城までくればわかる」

源五は、かまわずにひきたてた。

松山城二の丸の庭前にひきだされたのぶは、城主忠知の病的にゆがんだ目のひかりにみすえられ、身をかくしておののいた。

「わしは——」

忠知は、ひくく、うめくような声をだしていった。

「この女の、腹が憎い。腹が憎いのだ。わかるか、源



五——」

このことばに、ハッとして

源五は、のぶの腹のあたりへ目をやった。

「女の帯は、たしかに、まるみをみせてふくらんでいた。みごもっているのである。」

「憎いのだ、わしは、この腹が」

乱暴にも、忠知は足をあげて、力まかせに女の腹をけりつけた。

「ひえッ」

左右の手を背なかに縛られているのぶは、なんの抵抗もなく、あおむけざまにのけぞった。

すそがひるがえり、二本の足が、城主の前に、あやしい白さをもって、もつれた。

「この女を、はだかにせい！」

憎悪の目を血ばしらせて、忠知はうめき、ペッとつばを吐いた。

男子がほしい

松山二十万石の城主、がもうなからかきたゆうたきとも蒲生中務大輔忠知には、世継ぎがいなかった。

つまり、男子が生まれな





かった。

世継ぎがなければ、お家は断絶する。それが、徳川幕府の苛酷な政策方針だった。

忠知の祖父は、有名な蒲生氏郷である。この名家も、男子の出生がなければ、当代でほろびるわけだ。

忠知は苦悩し、あせった。

しかし、正室はもとより、側妾たちにも、懐妊のキザシをみせるものはいなかった。

家臣たちの憂慮も、主君同様である。
あたらしい女を、つぎつぎと主君の寝間へ
おくりこんだ。

忠知といえども、むろん、きれいなミチではない。おくりこまれる女を抱いて、毎夜、精をだした。

いまの忠知にとって、これがもっともたいせつな仕事であった。

だが、懐妊する女は、ひとりもない。忠知はガムシヤラになり、ひるも夜も、子をはらませるための、死にものぐるいの努力をした。

ムダであった。

忠知は疲れ、心身ともにやせほそり、いよいよ、あせった。

そしてある日――。

町家の女房の、みごもっている腹をみて、疲れきった忠知の頭脳は、ついに、ゆがみをみせた。

あせりが、シットとなり、さらに異常な憎しみと変じたのである。

城中二の丸の庭前には、ちょうど、人ひとりがねそべられるほどの大きさの石がすえられてあった。

この観賞用の大石が、おそるべき、ごうもん台と化した。

すはだかにされたのぶは、この石の上に、あおむけさまに縛りつけられた。

十九歳の若妻の肉づきは、白くまろやかに、まぶしいほどの美しさであった。

が、城主の目は、女の裸身の、一部分だけにそそがれていた。

その一部分とは、腹であった。

青白い色で、ぷっくりと盛りあがった腹。

内部に、ちいさな肉体の魂をつつんだ。神秘のふくらみであった。

「おのれ、これが、子をはらんだ腹か」

忠知は歯がみして、それをにらみすえた。

石に縛りつけられた女の裸身は、むごたらしい光景のなかに、動物的な、ふしぎなまめかしさをみせて、波のような呼吸をくりかえしていた。

石の上の裸女

「うてッ、この腹をうつのだ。憎い、憎い腹



をッ、かまわぬ、うってうって、うちすえるのだ！」

忠知は幽鬼ゆうきのような顔になってわめいた。家臣たちは、たがいに目と目を見合わせ、こまったという表情になった。

いくら戦場において、勇猛果敢な力をふるうつわものといえども、つみとがの無い、はらみ女の肌をうつことには、さすがに、ためらいをおぼえる。

だが、忠知はくりかえして、その暴令をどなった。

「では、せっしゃが——」

大浦軍兵衛という、へつらいを得意とする武士がすすみでた。

青竹を片手につかみ、軍兵衛は石の上の哀れないけにえにむかって立った。

女の手足、胸の乳ぶさの上下にも、ぎっちりいっすんと縄がくいこんでいる。

一寸なりとも、身をかわすことはできないのだ。のぶはくちびるをひきつらせ、目をとじた。

「女、かくごせい！」

軍兵衛のふりあげた青竹は、ねらいをあやまたず、のぶの腹に落ちたのだ。

石に縛りつけられた裸身が、びりりッとする



るどいけいれんをみせ、のぶの口から、ぐうッというケモノじみたうめき声が吐かれた。なまぐさい風がふいた。

「うて、うてッ、つづけてうてッ」

忠知は夢中になり、腕をふりまわしてさげんだ。

びしり、びしりッと青竹は、もりあがった腹に鳴った。

青白いハダは、そこだけがべつのまるい生きもののように、あえぎくねった。

「うーッ、うーッ」

と、のぶは吠えるようになり声をあげ、縄もちぎれんばかりのはげしさで、石の上にももだえた。

主君の狂気がのりうつったかのように、軍兵衛はムチをふりつづけた。

やがて女は、口からアワをふいて気をうしなった。

すさまじいムチあとが、女の腹にやきついていた。

「みぐるしい、とりのけい」

忠知はめいじだが、そのひとみの奥には、異様な火がもえついて、チロチロと狂ったひかりをはなっていた。

はらみ女にたいする忠知の異常なシットと憎しみは、そののち、さらに狂気の度をくわえていった。

忠知は、領内にすむ妊婦を見つけしだいに捕縛し、いやもおうもなく城中へひきずりこんだ。

そして、二の丸の庭前の、れいの大石の上に縛りつけては、責めさいなんだ。

「わしは、このふくれあがった腹が憎い！」
ついには、縛りつけた妊婦のはだかの腹を、刀をもって切り裂いた。

身をたちわられた女は、当然、胎児^{たじ}もろとも、絶命した。

おびただしい血が、大石を赤くぬらし、庭土のなかにしみこんだ。

主君の暴状におそれおののいた松山城内外の者たちは、いつかその大石を、マナイタ石とよぶようになった。

朝に夕に、そのマナイタ石は、不幸な女の血にぬれた。血の上に血がかさなり、かわく





ことがなかった。

くるった城主は、女の腹を裂き、血にまみれた胎児を、わしづかみにつかみだし、地にたたきつけては大笑した。まさに、地獄の城。

のろいの群れ

「殿、およろこびなされませ。お鶴の方さま

に、ご懐妊^{かいたん}のしるしがみえましたぞ」

家老の報告に、忠知の顔がさッと輝いた。

「なに、鶴が懐妊とな」

お鶴の方というのは側妻^{そばめ}のひとりで、身分はいやしいものであったが、容色^{ようしよく}すぐれているために、忠知のちょう愛をうけていた。

松山城に、ひさしぶりにあかるい太陽がふ

りそそいだ。

これで男子出生すれば、二十万石は安泰である。

マナイト石の血も、ようやくかわきはじめた。

ところが――。

このお鶴の方の身边に、夜ごと、怪異のかけがつきまといはじめた。

寝所にぬむるお鶴の方に、夜半、髪をおどろにふりみだし、血みどろすがたの女の群れが、魔鳥^{まちょう}のようにおそいかかるのであった。

その女たちは、いずれも一糸まとわず、腹部からはべっとりと血をながしていた。

「あれえッ、だれかッ」

悲鳴をあげて、お鶴の方は夜具の上にすくみあがった。

寝所の周囲には、十数人の武士が、夜どおしの警護にあたっていた。

しかし、武士たちの目に、その奇怪な女ど



もの姿はみえない。

お鶴の方におそいかかる女どもは、亡霊であつた。マナイタ石の上で殺された女たちの亡霊であつた。

「ああ、おそろしい、たすけてえッ」

お鶴の方は、この恐怖にのたうちまわる。妖異の女たちの手は、逃げまどうお鶴の方の寝衣をつかみ、ひきはぐ。

そして、縄をもってお鶴の方の両手を縛りあげると、れいのマナイタ石の方角へひきずっていくのだ。

「ひひひ、忠知の子も、わたしらと同じ地獄へつきおとしてやる」

ぶきみな嘲笑とともに、お鶴の方のからだは、マナイタ石の上に縛りつけられる。そのまわりを、血みどろの女たちは、狂喜

乱舞するのだった。

女たちののろいは、一夜もやすむことなくお鶴の方を責めつけた。

もとより、これは、お鶴の方の幻影であつた。だが、忠知の子をはらんだお鶴の方の脳裏から、ざん殺された女たちの血にまみれた幻影は消えなかった。

この恐怖のために、ついにお鶴の方は流産してしまった。

さすがの忠知も、この流産の知らせをきくや、がっくりと首うなだれ、声もなかった。

寛永十一年八月十八日、この暴君は、参勤交替のため、江戸へむかう途中、大阪でやまに倒れ、そのまま死んだ。

神経とからだをすりへらし、衰弱しきって息絶えたという。

まだ三十歳の若さであつた。

腹を裂かれ、子を殺された女たちののろいが、この城主のいのちをちぢめたのかもしれない。

世継ぎのない蒲生家は、こうして廃絶された。

多くの女の血と涙にぬれたマナイタ石は、いまも松山城の山腹、二の丸あとにのこっている。

げた手足を押えつけた顔の上にのしかかる女



女囚牢の中の無残な私刑

金沢武行

間引きされる女囚

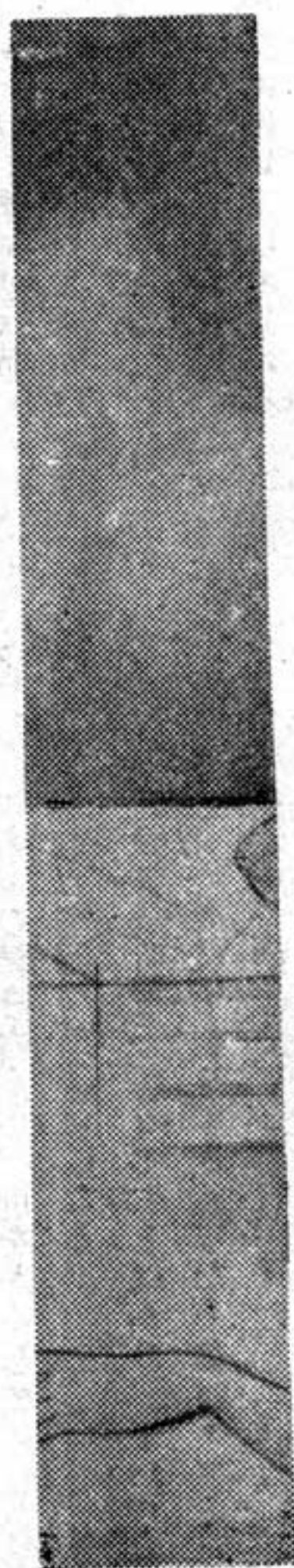
江戸時代、罪を犯した罪人は、伝馬町にある牢屋敷に収容されたが、現代と異なり、封建政治の下のこととて、罪人の人権などは、全く無視された時代である。

捕えられても、弁護士を頼めるわけがなく、また、裁判も、今でいえば一審だけであり、おそらく、罪なくして断罪されたものも数多かったと想像される。

だいたい、町方の役人に捕えられ、番所へ引かれた場合、人殺しや火つけなどでなければ、五十両から百両ぐらいのワイロをつめば、もみ消すこともできたが、奉行所送りとなれば、地獄のような牢屋敷へ送られることは、覚悟しなければならなかった。

平均すれば、月に二〇〇人内外が処刑され

大の字に広



た時代であるから、ここへ送られて来る囚人は、全く人間としての取り扱いを受けず、とにかく彼らを苦しめたのは、獄内の独特の制度で、一種の自治組織とでもいうか、罪の最も重そうなすごいやつが牢名主となつて君臨し、ひらの囚人たちを苦しめたものである。

大きさは二十四畳だが、畳は全部十五畳、五畳、三畳、一畳と、二カ所と五カ所につき上げ、一番高いところに女牢名主がすわる。

定員は、記録によると、一九二名となっている。しかし、実際には、そんなに入れるわけがないが、最高一〇〇人ぐらひはつめこんだことはある模様である。

なんといっても、牢内は狭いので、隠し狩り込みといわれる淫売狩りなどがあると、何十人も女囚が、数珠つなぎにつめ込まれる。そうであっても、役付きは相変わらずゆったり場所をとるので、ひらの女囚たちは、板の間に一畳当たり十人以上の割で詰めこまれる。こんな時に行なわれるのが間引きで、ふだ

んからじやまな女囚が消されるのである。

役付きに目をつけられた女囚がまずやられるが、牢内のまん中にうつ向けに寝かせ、手足を大の字にひろげさせて、数人の女囚が押える。そこへ、からだのでっぶり太った女囚が進みでて、消される女囚の顔をまたいで立ち、胸板めがけて大きなお尻をどすんどすと五回、とび上がりざま落とすのである。

口をふさがれ、ものも言えないで絶息した女囚は、翌日、遺族にも引き渡されずに、お取り捨てといつて、ごみのように捨てられる。

この間引きの目的は、少しでも場所をつくるためと、もう一つは、女牢名主などが若い美しい新入りの女囚たちを意のままにおもちやにして服従させるためで、どんな剛氣な女でも、この間引きの私刑をまのあたり見せられては、恐怖に身を震わせて、どんな卑猥で淫靡な要求にも易々として応ずるようになる。

男と隔てられて幾月幾年もの、そんなあばずれたちは、美しい若い新入り女囚をしいた

げることだけに、生きがいを感じるかのように、次から次へと新手の責めを考え出してはひらの女囚たちを苦しめていたのである。

裸体にタスキだけ

そんな時代のある日のこと——
薄暗い牢内で、女牢名主、だっきのお百の
声が重々しくひびく。

「お民、肩をもんでおくれ」

名指されたお民というのは、きのう入牢したばかりの、二十三、四の若い女囚である。
浪人の娘で、長わづらいの床についている父とふたり暮らし、その日の暮らしにもことかくほどであったが、生まれつきの美貌で、大柄な、色の白い娘だった。

当然、付近の若い男たちの注目の的となり、ちやほやされるのをねたんだ性悪娘の陰険なたくらみにおち込むはめになった。

湯屋で入浴しているすきに、脱いでおいた着物のたもとの中へわざとかんざしを入れ、かんざしが盗まれたと騒ぎだした。いろいろと調べて、彼女のたもとの中にあるとわかり、うむを言わず番所へ引かれ、あげくは、ひんぴんとして起こった板場かせぎの罪を背負いこまされて、つけ届けが全然ないた

めに、ゲスな女どもがほうり込まれる女牢に入牢ということになった。

ご承知のように、ここはいっさいの待遇はつるの高によって左右される。そこで、だいたいの入牢者は、分に応じてなにがしかのつるを、秘術をつくして牢中にもち入り、また、入牢後も外部に連絡して、追いつるを差し入れてもらって、息をつくということになる。つるとは牢内へ持ちこむ金のことである。

ところが赤貧洗うようなお民は、文字どおりの文なしで入牢して来たのである。

そんな彼女が、どんな待遇を与えられるかは、いうまでもない。

つるの一両以下は、向こう通りの板敷きへ追いやられ、一畳ぐらいのところへ、多い時は十人以上もつめこまれて、ぎゅうぎゅう言わされるが、一両以下でも、額によって待遇がかかわり、二分以下だと、囚衣もはがされて腰巻き一つというあわれなことになる。

お民のような例外的なスッテンテンは、どうかというと、腰巻きを腰につけさせてもらえないで、背中へたすきがけだけというこっけいな姿にされるのである。

しかも、牢内で立って歩くことを許されず、四つんばいではわされる。

両手で前を押えてシクシクしゃくり上げていたお民は、召しに応じてお百のほうへ行こうとするが、四つんばいの定法を思い出して、しばしためらった。

彼女にとって、四つんばいにはうごと自体の恥ずかしさもさることながら、そんな格好でむき出しになる個所に放たれる淫売女囚たちの悪罵にたえられなかった。

仕置き役のお富士は、怒声を発して、お民に近づくと、いきなりお民の髪をひつつかんで前へずるずると引きずり出し、「さっさと名主様のところへはっていくんだよッ」とどなる。

お民は、顔をまっかにして、右手で前をかき、左手と両足ではってお百のところへ行こうとする。

すかさずお富士の罵声（ののしり）がとぶ。

「右手を床につけるんだよッ」

お民のムキ出しの白い大きなお尻に、非情のキメ板がふりおろされ、痛さにたえず屈辱にむせび泣きながら、前をかくしていた右手を放して四つんばいになる。

とたんにまっかになりましたとばかり、まわりの淫売たちは、口々にきくにたえないゲスなからかいを始める。

夫婦生活の
マクークイン

性欲減少に!!
早漏防止に!!
インポに!!

本器は磁力放射線を合法応用化した製品で行為時の持続、感覚が倍増され性生活の悩みは即時解消いたします。定価 各個 八〇〇円 (送料共)

夜のムード……とても可愛い……シビレル様な何にもいわない可愛い……

出版目録密送す
要下(三〇〇円)
要上(三〇〇円)
要下(三〇〇円)
要上(三〇〇円)

初夜の性技・寝室の宝典・性技大鑑・女性征服・完全なる結婚・性愛の技巧・性愛秘典・性の百科全書・肉蒲団・房内記・房外記・その他各種

東京都中野区野方町二の一四九七の一

マクークイン本舗 信光社
振替東京 五一七二八番 電話三八五局六五〇六番

金時のようにまっかになったお民は、また禁を破って右手を前にあて、お百のところまでずっとなで行く。

お百はじゃけんに、お民の顔を、右足をあげてけりとばし、

「つるなしが定法をお忘れかえ。四つんばいは、両手両足ではうこった。やり直しだよ。くやしかったら、追いつるを早く工面しな」

羞恥の極 天の橋立

牢名主のお百は、この浪人の娘のお民が非常な恥ずかしがりであるのを知っているの、また、よい思案が浮かんだらしく、

「肩をもむのはお直にしてもらう。それよりもみんなお民に板場稼ぎのコツをひろうしてもらおうじゃないか」

「それがいい、いそれがいい」

お富士はお民に、

「さ、おまえさん、ごひろうアイサツだよ、定法を知っておいでかえ。さ、まん中に立って、天の橋立^{はしだて}またのぞきの格好で、名主様の顔を、またの間から押んでから秘伝をひろうするのだよ」

普通の女囚なら、腰巻きをさせてもらっているからそんな格好は恥ずかしくてもどうかしのげるが、腹から下はむき出しのお民が、そんな格好をするとどうなるか、取り巻いた女囚たちは、かたずをのんで見守る。

牢じゅうの女囚の視線を浴びて、お民はいよいよからだを縮ませ、身も世もあらぬ風情である。

「さ早くアイサツするんだよ」

お富士がまた促す。それでもお民は、床にうつぶして丸くなっている。

「みんな、お民に手をかしておやり、おかしくってアイサツできないらしいから」

お百がイラだったように言うと、四、五人の女囚がワツとばかりに立ちあがってお民を

取り巻く。そのまん中でお民は生きた顔色もなく、まっさおになって、ふるえている。

「お嬢さま育ちだから、自分じゃできないんだろ、さあ、あたしたちが手伝ってあげるよ」

「さあさあ、お立ちになって……」

わざとやさしいことばを使っているものの、女囚たちはもう、この加虐のえものに、異常な興奮を高ぶらせている。そして、お民の手をとり足をつかんで、天の橋立をさせようとする。

お民は、けんめいにあらがうのだが、多勢に無勢、しかも、女囚たちは、男を男とも思わぬあばずれぞろいだ。とてもかなうものではない。たちまち、お民は、両足を開けさせられた姿勢で、頭をぐっと押し下げられ、いわゆる天の橋立の形をとらされた。

身もがきしても、両手両足を押えられ、首を曲げさせられているのだから、どうしようもなく、つき出したお尻は、恥ずかしい姿勢でお百のほうに向けられている。

この屈辱の姿勢で、お民の青い顔色はまっかになり、つぶった目からは、涙がポロポロこぼれている。

そんなお民を心地よげにながめながらお百は、お富士に言う。

「みごとなながめだねえ。まだ男を知らないようだから、教えておやりよ。そうでもしないと、つるの工面ができないんだろう」

お富士は待ってましたとばかり、お民のむき出しにされている「女のいのち」にキメ板をふりおろした。

「ああーッ！」

思わず悲鳴をあげたお民は、身をよじって次のキメ板を避けようとしたが、手足を押えられているのだから、どうしようもない。

そんなお民の恥ずかしい個所に、お富士はキメ板を何度も打ちおろした。

たちまち、お民の白い尻は、まっかにはれあがり、親にもふれさせない羞恥の個所からは、鮮烈な血がふき出し、彼女は、その場に失心してしまった。

こんな風景は、しょっちゅう見られた。

もともと女はいざとなると男より残忍性を発揮するものだし、ことに、男を男とも思わないしたかな女ばかりがより集まって、何カ月も、何年も浮世^{うきよ}と隔絶されているのだから、その陰険無残なことは、目をおおうばかりだったことは、想像に難くないだろう。

とにかく、江戸時代の女牢は、この世の地獄といってよからう。

工夫!! 占する

夫婦和合の秘器

NEO ワゴリーリング

★ 30分は完全持続!!

◎ワゴリーリング(併用)の驚くキキメ!



★早漏は

局所の異状過敏が原因ですから、本ワゴリーリング(併用)により充分膨大し且つ鈍化した亀頭冠部が露出し

ますので、双方共すばらしい性感を盛り上げて30分は必ず持続します。

あなたも今すぐお試し下さい。行為時間の延長は、あなたの人生に素晴らしい幸福をもたらします。感謝状が沢山きました。不審の方はぜひ御来社下さい。

★インボも。数分でピン!!

“取付けるだけでOK”

あなたは行為前又は途中で萎縮して失敗する事はありませんか? こんな時はすぐワゴリーリングが役立ちます。ただハメるだけでOK! 而も数分で完全硬直し、驚く程頼もしく隆々としてきます。尚、射精後も萎縮せず副作用もありません。

読者の手紙に湧く喜び

●白人の妻が歓喜!
一月に御社からワゴリーリングを送って頂き其の後そのたびごとに大変な喜びが私に増大し、私共夫婦は白人です。此の度は一ヶ月分とラージ増大器と精力増強薬一ヶ月分とを御送り願います。CANDIDA (カナダ) 岸山

●妻がとて...
勃起力旺盛となり喜んでおります。私は現在56才のため、そろそろ老年期です。ワゴリーリングを使用し、秋田県 平谷にも喜ばれております。神戸市 川田

●二十二年も若返った
真に結構なもの有難く使用しました。小生二十二年も若返りました。



XX断面

ラテックススポンジ

愛用者112,883名 (36.3.1調べ) に及ぶ評判のワゴリーリング

ニセモノ注意

最近本社の広告とニセモノの広告が二、三、磁気等と根拠が違いますので御注意

◎米国にもある!

アサヒ芸能3月30日号トップ記事に「アメリカにも同一の方法はあるが総合的に見てワゴリーリングの方が優秀である」と絶賛されております。



●貧弱な性器を強大にする!

ラージ真空増大器

短期にぐん肥大する

新原理と

事実のお知らせ!

★短小の悩みに光明

あなたは、ボディビルをやった人の胸部のより上りを見ましたか? これをやった人はスグ判ります。肩の三角筋の付根や胸部の筋肉がもりもり発達して行きます。



●一日も早く増大の喜びを得たい人は、今すぐ申込みよ!

【ラージ真空増大器】

(割引) 特価 11,450円 (送料当社負担) で特急発送中です ●御注文は現金書留か、カワセで御願います。

◆つまり 局部的の運動を集約的にくり返せば、筋肉に慣性が与えられて、みるみるその部分が隆々としてくるのです。

◆ここに ボディビルと同一の原理であるたの性器を膨大させる素晴らしい方法があります。



(新発明のラージ増大器)

女性を独愛

★全商品送料サービス★

スポンジスキン

◎特許
★従来のスキンの外面に微粒突起を付す新形式の高級産制スキンノ

一ダース 三〇〇円
二ダース 五七〇円
三ダース 八三〇円
四ダース 一、〇〇〇円

産後肥るぎ(手芸品)

☆粋なおみやげ
贈物に大好評！
特製一函 七五〇円



オットセイ



★一雄で百頭のメスに似ても驚異のオットセイの卵丸を乾燥、粉砕精製した天然ホルモン、福寿素の服用は、若々しいエネルギーを造る源泉です。

福寿素
割引 980円

特殊コケシ

◎女性の間に引張りだこ！
①湯又は水に浸すとスポンジより感触がよく、やわらかくなりヨゴレは石けんで落ちます。
②大中小の太さは全部同一で、中小は短かすぎるので、大が最適です。

好評新発売！
六五〇円

精力チョコレート

★市販の甘い板チョコに媚薬ヨヒンピンを配合した性愛チョコ(男女共有効)
トースサンピン
六枚 一函 六〇〇円
サーモンチョコレート
(米国へ好評輸出中)
八枚 一函 一、二〇〇円

自動アンマ器

特価 (ゴム付属付) 1,950円



◎女性の不感症！
★お悩みの処にアテルだけで自動的に、快テンポでパイプレイターが肉体を快美に導く！
☆女も男も一度アテたらやめられぬ無類の快アンマ器の出現！

純ズイキクリーム (女性用)
★ただ塗るだけで元不感症の女性にちよつとぬれば喜ぶ特殊クリム
●四百年伝来の性の靈薬として著名ノ
三九〇円



OK クリーム

★避妊と性病予防に効果百%
▼避妊には女性の局部にクリームを押し出せばOK！
▼淋病、梅毒の予防には男性器にぬればOK！
(厚生省認可)
一函 五〇〇円

8ミリ(ヌード)映画



☆男も女も見てビックリ！必ず喜ぶ秘蔵版始めて公開！
▼錠を破る女
▼鍵穴の秘密
▼若い花びら他
各巻 1,300円

★快感を倍加する！
本ワコーリング使用で数分以内に陰茎は膨大し直径五ミリ長さで一、五厘も大きくなり特に龜頭冠部の増大が著しく包皮も根元の方に引張られるので、我ながら意外に思う程たのもしものになります。

無代贈呈

ハガキで申込次第、総合カタログ無代進呈中です。●直接、御注文の場合は現金書留か、為替が安全です。

特価

一組 一、三五〇円
(個人名で送ります)



東京都杉並区神戸町二二八
株式会社療養の友社
電話 398 四六七九 振替東京 118443
(高田馬場より西武線井荻下車、徒歩約三分)
(国電荻窪より井荻駅行バス5分 柿の木町降)

読者サロン



ボクは六尺マニア

ボクはすし屋の板前です。六尺マニアで、同じ店に住み込んでいる兄いのFさんから、『風俗奇譚』をみせられてから、強度のフンドシ・マニアになりました。

兄いは、ちょっとした男まえで、男性モデルの南郷次郎さんを小がらにしたような二枚目です。ところが、兄いのFさんは、軽度のSで、店の休日には、ボクとふたりでプレイをするのが、なにより楽しみです。

とにかく、われわれをリードする雑誌として、今後とも愛読、兄いのプレイ時の参考にしたいと思う。編集部の方々ががんばって下さい。

(東京・達郎)

力作の小説望む

小生は、貴誌の古くからのファンの一ひとりとして、感じたままを参考までに述べたいと思います。

① 写真の鮮明度は美しいですが、モデルの表情に迫力がな

② 掲載の小説半数は感心できない。もっと読みごたえのあるものをあつかってほしい。随筆や解説ふうのものでなく、重量感のある作品を掲載してほしい。戦後K誌で「不知火——」という小説があったが、このような力作を多くあつかってほしい。

③ グラビアで「日本髪特集」をやってもいい。ただしカッパは絶対使用しないこと。

以上三点を配慮されたし。

(東京・小林)

どなたかご指導を

貴誌創刊以来の愛読者です。ボクは妻帯者ですが、どうしたわけか男色を好み、六尺マニアでもあります。

まだS・Mのことについては、あまり知識がありませんが、どなたかご指導くださる同性はおらないでしょうか。ご連絡ください。(和歌山・T・K)

モデルに使って!

小生はマゾヒストです。どなたかボクをヌード・モデルに仕立ててくださるかたはおりませんか。おたよりください。

一糸まとわぬハダカにして、両手足を縛って責めてください。浣腸もOKです。そのほか、コケシ、ナスビなど大いにつくります。いかなる苦痛にも耐える覚悟です。

近県のかた、おたよりください。(福岡・SM)

南郷さんをもう一度

ボクは高校三年生です。『風

俗奇譚』のファンだなんて言う、教師や父兄にしかられるが、それでも、変に誤解しないでほしい。

ボクはこの雑誌に魅力を感じるのは、女性でなく、あくまでもフォートの男性美なのです。そこで、編集部に望みたいのは、

① 女体ヌードは他誌にあるので、男性ヌードだけにしてほしい。

② モデルのヤセているのはムードがでないから、できた、たくましい男性を選んでください。

③ 男同士の同性愛のシーンをふんだんに。

④ 外人ヌードもあつかってほしい。

⑤ 美少年縛りがほしいものです。

なお、南郷さんが、最近誌上に見えないので寂しい。ぜひ写真に撮ってください。

(岩手・ハンサム)

どなたか友だちを

毎月の貴誌の発売を楽しみにしている読者のひとりです。

どなたかボクとご交際してください。ボクは二十二歳の勤め人です。友だちのいない現在のボクは、寂しいのです。この気持ちをわかって——。

(岡山・村上善助)

責めに応じる女性を

小生の責めに応じてくれる女性を求めています。ムチ打ち、浣腸、いろいろ研究しているが実験に協力してくれる人がいない。男よりも女性を望む。ご希望のかたは、読者欄に住所氏名をお寄せください。

(座土マゾ男)

ほしい女禪の流血物

『読者サロン』で、女禪狂様はじめ、同好のかたの「裸女流血沙汰」や「女禪」をあつかったものを望む声もあり、画報風奇10月号にも妖艶女禪仇討ちで亡夫の禪をしめて夫の仇を討つ読み物と絵がでており、マニアを喜ばせています。そこでマニアのひとりとして、次の題材をしるしました次第。

城中でのお小姓組と奥女中たちは、常に仲が悪い。とうとう流血沙汰に及ぶ。禪一本のはだ

かとなり、入り乱れて斬りあう。

ふとった禪一本の奥女中が前段の美少年を下肢に組みふせ、傷ついた小姓にとどめを刺すくんだり、などをテーマに描いてもraithたいと思う。

(大阪・アブノ生)

山田様らと文通を

晩秋、やがておとずれる冬にそなえ、われわれ愛禪党やらS・Mには一段とプレイの季節到来と思う。

さて、東京の山

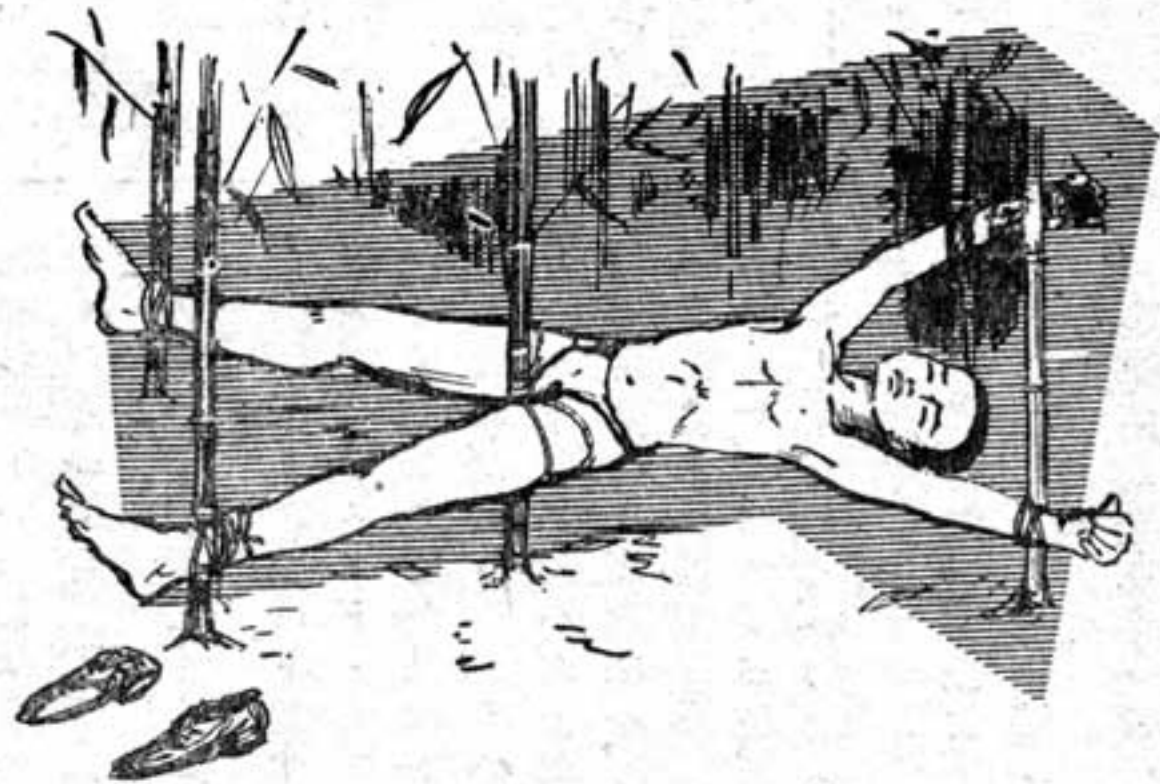
田様、そしてM生様、ぜひ文通したいのです。また大阪のHQ様、近くでもあり、一度お目にかかりたい。

さらに和歌山由夫様おたよりください。(宝塚市伊子志三味、

正宝荘内・南隆義)

禪の伝統を守れ!

大阪の芳山様、おたよりあり



竹ヤブに大の字にしばられた美少年 <大阪・宮田>

がたく拝見させていただきまし

た。なにも知らない、またできない未熟なわたしですが、どうぞよろしく。

お互いに日本男子の象徴であるフンドシの伝統を守るため、がんばりましょう。そして研究しましょう。貴兄の健康を祈ります。(京都・愛禪生)

大沢さんご住所を

『風俗奇譚』8月号の読者サロンに寄稿された大沢照夫さん。あなたの希望にこたえ交際したいと思っています。

小生は二十六歳のサラリーマンです。すぐご返事ください。なお、ボクの住所氏名は編集部にありますから、お問い合わせください。お待ちします。

(横浜・H・M生)

紳士との交際望む

ボクは二十三歳の会社員。交際を望んでいます。年齢はボクより年配の紳士。その道を教えてください。もしこのようなたが、おりましたら、おたよりください。住所はあとでお知らせしますから……。

なお身長は五尺七寸、体重十八貫五百でスポーツで鍛えたからだけに、プレイには、自信満々です。(東京・O生)

年上の人と交際を

『画報』9月号に、わたしのホモ回想が活字になりたいへんうれしく思っております。また原稿料をいただき、ありがとうございます。

<とらわれの幻想>

① 大学一年生の山田一夫は強盗罪により、少年刑務所に送られることになった。
学生服のまま高手小手に縛られ、警官に縄尻をとられ、こづかれながら刑務所まで歩かされるのだった。

② 刑務所での囚衣は丸首シヤツにGパンである。かれはそれを着せられて、多くの少年囚たちと苦役に服した。



かれは、ある日、規則をやぶって懲罰を受けた。懲罰室に連行されたかれは、股間と後ろ手にしばられて、三角木馬にまたがされて数時間も放置された。

③ 刑務所で一番精神的に苦しいのは、所外の労働である。かれは番として、69番とクサリをつけられて角材を運ばされるのだった。

(東京・Gパンマニア)



ざいました。
でも文章になっても、やはり寂しいものです。そこで、ほんとうに信じ合えるかたがほしいのです。どなたか身近なかたで、わたしとまじめに交際して

くださるかたはおらないでしょうか。
できたら、わたしより年上のひとがよいのですが……。わたしは二十二歳です。

(三重県・林正和)

女性の禪姿も

御誌では、いつも、男性の禪姿ばかりですが、なかには女性のフンドシ写真も掲載してほしいものです。

とくに女相撲のフォトであれば、たいへんうれしいのですが、そうもいかないでしょうから、とにかく女のフンドシ姿を次号からのせていただきたい。なお、フンドシは白よりも色物がよいと思う。

(東京・鈴木一郎)

海水禪を愛用しよう

小生は、十九歳の愛読者。目下、地方から上京して、R工場の寮に住んでいる工員の身分である。

ボクたちは、四、五人の友だちで黒禪を愛用している。しかも水泳用のフンドシである。六尺より利用範囲が広いし、洗たくも簡単な点が、まずなにより魅力である。

さらにボクたちは、ポイントに乗ることが、休日に与えられた楽しみだけに、黒フンとクレープシャツという、イカすスタイルで、ふっとばせるだけに快適。夏は、そのまま海につかって泳げるという仕組みも便利である。

来年は、ぜひこのスタイルを若者に流行させたいものである。

(堺・スピード男)

東京・紅子様へ

東京・紅子様あなたのご投稿9月号の「読者サロン」で拝見しました。わたしのほうこそよろしくお願いいたします。きつとご期待にそえるものと確信しております。

それから、お手紙の件ですが、わたくしの住所あてに出してもさしつかえありませんから、すぐお手紙ください。お待ちしております。

なお、あなたにはご迷惑はおかけいたしませんから、ご住所と氏名をはっきり書いてください、お願い申し上げます。

(東京・鈴木三郎)

禪ファンの文通を

男性フォトを楽しめる唯一の貴誌のバック・ナンバーも全部そろえたので、このうちは全国の禪ファンのかたからの楽しい文通を、待つばかりになりました。

それにしても、月ごとにふえる禪ファン読者の夢をみたしていただける禪美特集号の実現をのぞみつつしております。予約制でもして募集されれば出版で

きるのではないのでしょうか？

ともあれ、全国禪ファンの皆様、大いに禪美を語りたと思います。ドシドシお便りください。(京都市左京区下鴨蓼倉二木村方 上島邦夫)

毎土曜日に電話で

はじめのおたよりよろしくお願い申し上げます。小生ご多分にもれず、浣腸マニアのひとりでございます。

ひとりで試みておりますが、ひとりとは何事においても不満足なので、相手役を希望いたします。とくに都内に住む女性のそれを希望します小生もまだ十代の者なので十代のかたがよいと思うのです。連絡は(328) 55にTELしてください。毎土曜の午後八時前後にTELしてください。ぜひいっしょに楽しみたいと思います。(東京・道彦)

四国の縛られた男へ

小生でよかったら、思いつき縛らせていただき、思いきりじめたいのです。小生も妻子があるので、住所を誌上に書くわけにゆきません

が、四国なので、ぜひ会って、お互いに思うぞんぶん、心ゆくまで、同性のプレイをしてみたと、以前から、思っております。

小生四十歳、体重約二十貫、お互いに妻子のある身、無言のまま顔もおおって十二分に楽しみたいのです。なんとか会える機会を与えてください。香川県か愛媛県ならばいつでも会えます。

よい方法をお知らせください。誌上での発表を楽しみにしております。

(四国・縛りたい男より)

南郷さんに一目ボレ

ボクは『画報風奇』8月号のグラビアを飾った南郷次郎さんにすっかり魅せられた、男性ファンのひとりです。

とにかく南郷さんの裸体美とマスクは、最高にすばらしい。

男が男にホレるなんて、まったく不思議ですが、ボクは身も心も南郷さんを好きになりました。

(小樽・H生)

編集だより

号数からいうと、今年最後の本誌をおおくりする。思えば、一年という月日は、決して短いものではない。その間、悔いのない仕事をつづけられたという自負は、さらさらない。いつも力足らざる思いに駆りたてられた、苦い後悔だけである。しかし、新しい年を迎えるにあたっては、やはり、思いを新たにす、希望がもてる、張りきる。それが人生のケジメというものである。本誌もやはり、読者各位のご後援によって、来たる年の飛躍を期したい。

風俗奇譚 十二月号

定価二二〇円

昭和三十六年十一月二十日印刷
昭和三十六年十二月一日発行

編集人 高倉一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一ノ三五
発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番